

令和元年度

千葉県教育研究会技術・家庭科教育部会

研究のまとめ

研究主題

「生活や技術を工夫し創造する実践的な態度の育成」
～主体的・対話的で深い学びを通して～



千葉県教育研究会技術・家庭科教育部会

目 次

1	はじめに	千葉県教育研究会技術・家庭科教育部会長	山田 克彦	・・・	1
2	千葉県教育研究会技術・家庭科教育部会活動報告				
	(1) 事務局			・・・	2
	(2) 関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会茨城大会千葉県提案内容				
		技術分野	山武支部	・・・	3
		家庭分野	習志野支部	・・・	7
3	各部活動報告				
	(1) 研究部			・・・	11
	(2) 情報部			・・・	12
	(3) 中学校部			・・・	14
		①	千葉県中学校技術・家庭科作品展		
		②	第16回千葉県中学校創造ものづくり教育フェア		
		③	関東甲信越地区中学校技術・家庭科作品展		
		④	第20回ものづくり教育フェア関東甲信越地区大会		
		⑤	第20回全国中学生創造ものづくり教育フェア		
	(4) 小学校部			・・・	18
4	各支部活動報告				
	(1) 千葉支部			・・・	20
	(2) 市原支部			・・・	22
	(3) 習志野支部			・・・	24
	(4) 八千代支部			・・・	26
	(5) 船橋支部			・・・	28
	(6) 市川支部			・・・	30
	(7) 浦安支部			・・・	32
	(8) 東葛飾支部			・・・	34
	(9) 印旛支部			・・・	36
	(10) 香取支部			・・・	38
	(11) 東総支部			・・・	40
	(12) 山武支部			・・・	42
	(13) 長生支部			・・・	44
	(14) 夷隅支部			・・・	46
	(15) 安房支部			・・・	48
	(16) 君津支部			・・・	50
5	令和元年度役員・地区理事一覧			・・・	52
6	編集後記			・・・	54

1 はじめに

千葉県教育研究会技術・家庭科教育部会
会 長 山 田 克 彦

今年度は、中学校で令和3年4月1日から全面実施となる新学習指導要領の移行期間の2年目となりました。新学習指導要領では、次代を担う生徒たちが、豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となるとともに、生涯にわたって自立し共に生きる生活を創造し続けられるよう、資質・能力を育成していくことが求められています。既に、学校によっては、全部または、一部について新学習指導要領による教育課程を編成・実施しているかもしれません。本教科でも今回の改定の趣旨を生かし、題材などの内容や時間のまとまりを見通しながら、単に何かを作るという活動だけではなく、「技術の見方・考え方」「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせた実践的・体験的な学習活動へと転換を図り、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組まなければなりません。

しかし、教育現場で日々生徒たちと向き合っている先生方は、移行期2年目に入っても新学習指導要領の実現に向けた具体的な方策を試行錯誤している段階ではないかと思えます。そのような中、6月に令和元年度千葉県教育研究会技術・家庭科教育部会研究大会並びに定期総会が市川市立第六中学校・千葉県立現代産業科学館で開催され、多くの先生方のご協力、ご支援により、研究協議並びに総会が盛会裏に終了できました。研究協議では、本部会の研究主題「生活や技術を工夫し創造する実践的な態度の育成～主体的・対話的で深い学びを通して～」を受け、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の実現に向けての授業改善の様々な実践が提案され、今後の方向性が確認できたと考えます。

また、本教科の成果を発表する場の一つとして、11月9日に千葉県総合教育センターで開催された「千葉県中学生創造ものづくり教育フェア」があります。「創造アイデアロボットコンテスト」「めざせ！木工の技チャンピオン」「あなたのためのおべんとうコンクール」「豊かな生活を創るアイデアバッグコンクール」の4部門に、のべ298名の生徒が参加し、日頃の学習の成果を発表することができました。今年も4部門の成績上位者が関東大会、全国大会への出場権を獲得しました。12月1日に長野県長野市で開催された第20回全国中学生創造ものづくり教育フェア関東甲信越地区長野大会には、本県からもロボコン部門やアイデアバッグ部門に千葉県の代表としてエントリーしました。ロボコン部門では、千葉県のチームのうち、4チームが決勝トーナメントに進みましたが、残念ながら勝ち抜くことはできませんでした。アイデアバッグ部門では、千葉県1位の生徒が3位に入り、全国大会に進みました。木工部門とおべんとう部門は関東大会がないため、千葉県1位の生徒が全国大会に進んでいます。全国作品展を含めて、今年度も多くの生徒が上位入賞するものと期待しています。

さて、次年度は新学習指導要領の移行期間の最終年度となります。評価についても間もなく、国立教育政策研究所からモデルが示されると思えます。令和3年度の完全実施に向けて、確実な準備を進めていく必要があります。また、令和6年度に開催予定の関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会千葉大会に向けて、始動していく年でもあります。今年度以上に研修会等で仲間の絆を深め、資質向上に向けて力を結集させていくことが大切だと考えます。

最後になりましたが、私たちの研究に心温まるご指導をいただきました関係各位並びに、本まとめにご執筆いただいた方々に心より感謝申し上げますとともに、今後の研究推進のために変わらぬご指導、ご協力をお願い申し上げます、はじめの言葉といたします。

2 千葉県教育研究会技術・家庭科教育部会活動報告

(1) 事務局

1. 研究主題

生活や技術を工夫し創造する実践的な態度の育成

～主体的・対話的で深い学びを通して～

2. 活動重点

- (1) 研究活動の推進と成果の累積に努める。
- (2) 小学校家庭科及び中学校技術・家庭科の関連を図る。
- (3) 研究・研修活動の推進を図る。
- (4) 組織を強化し、機能を円滑にする。

3. 活動報告

令和元年

- 5月14日(火) 第1回役員研修会(県総合教育センター 金工室)
- 5月25日(土) 全日中技術・家庭科研究会理事会(女子栄養大学 駒場キャンパス)
- 6月7日(金) 関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究会理事会(茨城県水戸市)
- 6月19日(水) 第1回小学校部会役員研修会(ポートプラザちば)
- 6月28日(金) 千葉県教育研究会技術・家庭科教育部会研究大会市川・浦安大会並びに総会・作品
(市川市立第六中学校, 千葉県立現代産業科学館)
- 7月4日(木) 第2回役員研修会(県総合教育センター 金工室)
- 8月2日(金) 第16回千葉県中学生創造ものづくり教育フェア準備及び研修会
(千葉市立幕張西中学校)
- 10月2日(水) 第3回役員研修会(県総合教育センター 本館605)
- 10月8日(火) 第16回千葉県中学生創造ものづくり教育フェアおべんとうコンクール部門1次審査
(県総合教育センター)
- 10月16日(水) 第16回千葉県中学生創造ものづくり教育フェア会場打ち合わせ
- 10月24日(木) 関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会茨城大会理事会
- 10月24日(木) 同 全体会, 講演会(ザ・ヒロサワシティ会館 水戸市)
- 10月25日(金) 同 公開授業・分科会(茨城県内9分科会)
- 11月8日(金) 第16回千葉県中学生創造ものづくり教育フェア前日準備
- 11月9日(土) 第16回千葉県中学生創造ものづくり教育フェア(県総合教育センター)
- 12月1日(日) 全国中学生創造ものづくり教育フェア関東甲信越大会長野大会(長野県)

令和2年

- 1月25日(土) 全国中学生創造ものづくり教育フェア各県事務局長会議
- 1月25日(土) 第20回全国中学生創造ものづくり教育フェア
(足立区梅田地域研修センター他, 女子栄養大学)
- 1月26日(日) 同フェア結果発表, 表彰, 閉会式(東京芸術センター)
- 2月7日(金) 関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究会理事会
(ホテルキャメロットジャパン 横浜市)
- 2月14日(金) 第4回役員研修会(県総合教育センター 金工室)
- 2月15日(土) 千葉県中学生木工工作作品展準備・審査・展示
- 16日(日) ※千葉県木材振興協会主催(千葉県科学館きぼーる)
- 2月19日(水) 第2回小学校部会役員研修会(ポートプラザちば) 3月22日(日) 会計監査, 役員
選考会(ポートプラザちば)

※令和元年9月～令和2年3月 各地区作品展開催

(2) 関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会茨城大会千葉県提案内容

よりよい生活を目指し主体的に創造しようとする生徒の育成

— 身近なものを利用したエネルギー変換のための教具の開発 —

千葉県教育研究会技術・家庭科教育部会
横芝光町立光中学校 教諭 顧 篤範

1 はじめに

令和三年度から新学習指導要領が全面実施されるにあたり、技術分野では、①技術の発達を主体的に支え、②技術革新を牽引することができるように技術を評価、選択、管理・運用したり、新たな発想に基づいて、改良、応用したりすることによってよりよい生活や持続可能な社会を構築する資質・能力の育成が求められている。加えて、技術の改良や応用といったイノベーションへとつながる資質・能力の育成も重要となってくる。

自然保護や地球環境の保全を視野に入れて、持続可能な社会を生きていくことが求められている現代にあっては、前述の力の育成が急務である。その力の育成には、与えられた条件からただ1つの正解を見つける学習ばかりでなく、一方を追求すれば、他方を犠牲にせざるを得ないというトレードオフの課題から最適解を導き出す学習が必要である。そのためには「経済の発展」と「限られた資源の確保」と「環境保全」の三要件をうまく成立させるような方法を考えるとといったトリレンマの課題について思考し、判断するといった学習が有効であろう。

本研究は、エネルギー変換の技術に関する部分の教具開発がメインである。この分野でのトレードオフは様々な場面で出てくる課題であり、最適化する（最適解を導き出す）ために考える力がより必要とされる分野でもある。

千葉県教育研究会技術・家庭科教育部会がかかげる研究主題『生活や技術を工夫し創造する実践的な態度の育成～主体的・対話的で深い学びを通して～』をうけ、山武支部では、研究主題の「よりよい生活を目指し主体的に創造しようとする生徒の育成」を達成するために、本題材において、複数人で協力しての熟考を重ねる学習を通して、思考力・判断力・

表現力を育むと共に、主体的・対話的で深い学びにつながるようにしていきたい。

2 研究のねらい

(1) テーマの設定の理由

火力発電、風力発電などの巨大エネルギー変換システムは数十年前から運用されているが、近頃では各家庭レベルでの発電システムの充実が著しい。

もっとも一般的なものとして、屋根に設置するソーラーパネルがある。日常生活の中にもエネルギー変換（発電）がある現代だからこそ、より身近なものを利用し、個人レベルでも発電するためのエネルギー変換ができることを理解させていきたい。そして従来あるものを改良、応用していくことも技術分野での目指す部分であることから、本研究を行うことを考えた。

さらに重要視したことが三つある。一つ目は生徒たちにとって身近なものであること（生徒たちが親近感を覚えるレベルのものを使用する）。二つ目は再利用できるものは再利用すること。三つ目はエネルギーが変換される様子を可視化することである。

生徒たちにとって、より身近なものを使ってエネルギー変換ができるということで関心意欲を高めるとともに、その状況が目に見えてわかることで自らすすんで思考し、表現するための第一歩となればと考え、本研究をすすめる。

(2) 生徒の実態（理解状況）

事前学習において、火力発電や風力発電などのエネルギー変換についての学習を実施し、概要は理解している。その状況の中で、生徒たちに身近なエネルギーを活用した新しい発電のアイデアについてのアンケートを実施した。

身近なエネルギー源の活用

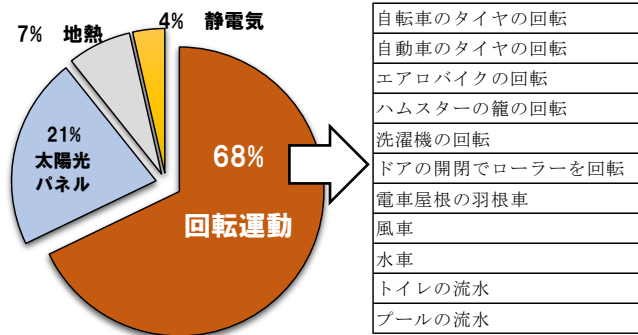


図1 新しい発電についてのアイデア
(第二学年のうち一つの学級を抽出)

生徒は、身近にある利用可能なエネルギー源として主に、回転運動による発電とソーラーパネルによる発電に着目している。特に回転の動力源としては、水力、風力、人力を効率よく活用しようと考えている。ソーラーパネルは、自動車のルーフに取り付け可能な比較的小型なものを用いた例が見られた。

大半の生徒は、既習事項である火力発電や風力発電などのことに触れているが、現実的に考えると厳しいものが多かった。その中で、個人レベルで製作できるのではないかとと思われるものを例として三つ掲載する。いずれの案もエネルギー変換としては、おもしろいアイデアだと考える。(以下の図2参照)

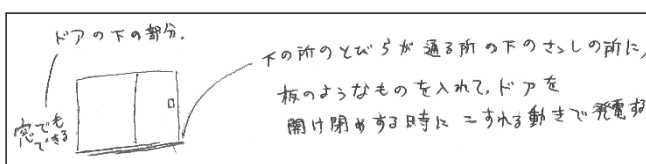
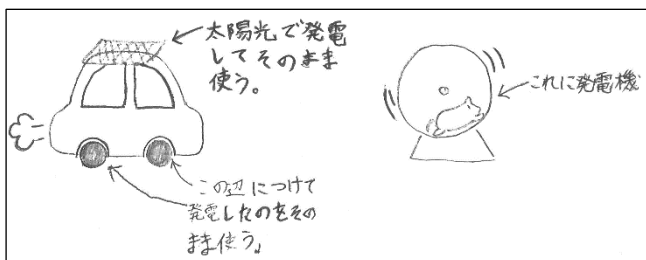
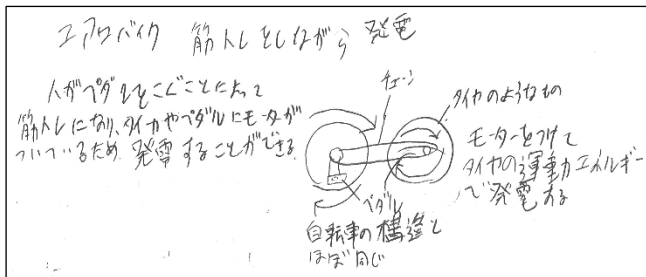


図2 生徒のアイデア (一部)

このアンケートから、生徒たちはエネルギー変換と言われると、大きなシステムを想像しがちであり、身近な個人レベルのものではエネルギー変換しない、あるいはできないと考えているようにも感じられる。このような現状を鑑みて、研究仮説を立てる必要がある。

3 研究仮説

本研究では、技術分野における目指す資質・能力の育成のため、また研究主題の「よりよい生活を目指し主体的に創造しようとする生徒の育成」をするために、また、生徒たちの現状理解の様子を踏まえ、次のような仮説を立てた。

身近なものを使って、動力・光(熱)・電気エネルギーが変換される様子を可視化できる教具を製作し、その構造と現象を理解することで、エネルギー変換に関する技術の利点や課題を自ら考え、生活をよりよいものにしようとする態度が育つであろう。

4 研究内容

本校の生徒の9割以上が日々、自転車通勤しており、自転車ライトの発電システムは身近な存在である。この仕組みを利用し、教室内でエネルギー変換を行い、発電できるように改良した教具の開発に関する研究である。テーマの設定の理由でも前述したが、身近なものである上、再利用可能なもの、そして変換状況が生徒たちの目で見て分かるような、可視化できるものであるべきだと考え、製作を実施した。

使われなくなった自転車のブロックダイナモ(以降、ダイナモ)を技術室のドアのサッシに取り付ける。固定されているスライドドア(以降、ドア)には直線のスポンジテープを貼り付け、ダイナモの回転部とドアの摩擦で、ドアがスライドするとダイナモが回転し、発電する仕組みである。さらに、その状況を可視化するために、回路に複数のLEDを取り付け、順に発光するよう改良した。

(次ページに写真を掲載)

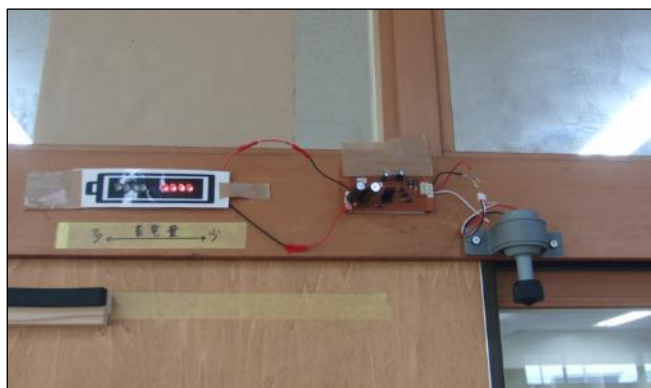


図3 教具体



図4 可視化の状況

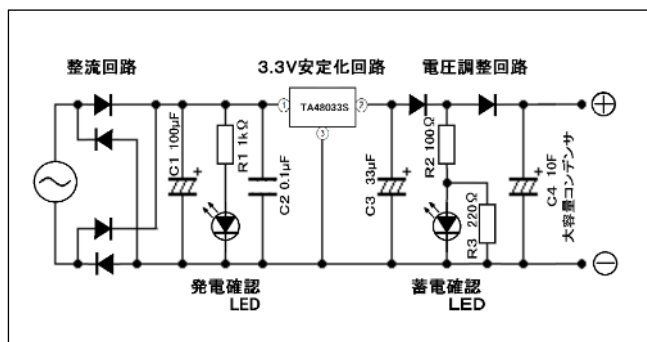


図5 電気回路図

実際に教具を開発する中で、当初は副教材として使用しているラジオのダイナモから発電をする手法を検討したが、歯車がプラスチック製であるため、ドアの開閉への負荷に耐えられないという強度面の問題が発生した。その解決のために、接地面がゴム製である自転車用のダイナモを採用することとした。解体したダイナモは円柱状であることから、サドルバンドを使い、ドアに固定した。一方、ダイナモの接触面である学校のドアは木製のものが多く、そのままではダイナモがすべって空回りしてしまう。つ

まりダイナモとドアの摩擦抵抗が低く、うまく発電に至らないという課題があった。そこで、安価であり、原状復帰が容易なゴム製のスポンジテープをドアに貼るといった形をとった。(図3)

可視化の実現については、小さな電圧でも点灯するLEDを採用した。開発した当初は、ドアをスライドしている最中のみLEDが点灯するという形式であったが、スーパーキャパシタ(電気二重層コンデンサ)を用いることで、蓄電量の可視化を試みた。また、蓄電量が目目でわかるようにするためにアナログ式ではなく、デジタル式のものを採用した。(図4)

この教具を見せながら、身近なエネルギー変換について解説を行う。生徒たちにも、実際に触らせることで、その仕組みや電気を発電することの難しさを理解させるとともに、身近な生活でできるエネルギー変換などについて、改めて創造する場としたい。

表1 本研究の計画

研修会での実施内容			時間
1	テーマ設定	研究の方向性を決定	2時間
2	研究仮説について		2時間
3	研究内容について	具体的実践	2時間
4	試作品Ⅰの製作	試作品を複数製作し、検証	2時間
5	試作品Ⅰの検証		1時間
6	試作品Ⅱの製作		2時間
7	試作品Ⅱの検証		1時間
8	試作品Ⅱの改良	オリジナル発電機の完成	1時間
9	研究授業	オリジナル発電機を使った授業	2時間
10	研究のまとめⅠ	成果と課題の整理	1時間
11	研究のまとめⅡ	提案資料の完成	2時間

5 研究の成果と課題

(1) 成果

日頃から利用している自転車の発電システムの改良版であることから、生徒たちはイメージがしやすく、関心意欲が高かったと考えている。本来自転車での発電は、回転運動（運動エネルギー）からの発電であるが、スライド式のドアを使った直線運動からでも同様に発電できることに最初は疑問に感じたようだったが、実際に見て「なるほど～」と自転車の発電の構造を再確認するとともに、おもしろいと感じたようであった。安価で発電できることも、生徒たちにとっては興味深い内容だったと思う。

今回の研究では“可視化”の重要性も意識した。エネルギーのたまり具合を言葉で伝えるよりも目で見えることで、生徒たちに明確に伝わると考えたからである。

生徒たちの中には、「これだけで、乾電池2個分(3V)の電気になるんだ!」「少ないね」とか「たまるのは時間がかかるけど、使うとあっという間だね。だから、節電しよう。」「前もって家で作っておけば、災害時の停電に対応できるんじゃない?」という声も聞かれ、この技術を自らすすんで評価、改良・応用を考えようとする姿勢が見られた部分は成果だと考えている。



図6 授業内での説明の様子

エネルギー変換を様々なところで活用し、きんきゅう時にそなえておきたいと思いました。

Q これからエネルギーをどう扱うか。
貯めるのに手間がかかっていることをしたので、もと電気を節約した方がいいんだと感じたので、使っていない時は電気をきちんと消さうと思います。

図7 生徒の感想（一部抜粋）

(2) 課題

ドアを2、3度開閉するだけでは、発電まで至らなかった現実がある。身近でできるもの、使われなくなったものの再利用も含め、安価でできるものということを第一として考えたため、実際の電力（発電）という点においてはものたりなさを感じる。その点については今後も研究をすすめ、改善していきたい。（加えて、エネルギー変換効率についての理解も深めなければならない。すべてのエネルギー変換は100%ではないことを、実験などをおしてできないかといったことを模索している。）

本研究のスタートでは、簡易さを求め、金属製のドアを利用し、ダイナモを強力磁石が使われているマグネットクリップにはさんで取り付けたが、ダイナモの角度等の要因で、発電までには至らなかった。

今回の研究も同じだが、一つの条件にこだわれば、別の面でうまくいかないことが出てくるとこともあるというトレードオフ（最適化）の考え方も意識させなければならない。また、様々な技術は「家の中では…」とか「学校では…」あるいは「一般社会では…」とケースバイケースで考えることの重要性も指導していく必要がある。

6 おわりに

今回、身近なものを利用した教具の開発を行った。この教具については、部品の選定（ダイナモである必要は無い）や手法など、まだまだ改善の余地があると考えている。もしかしたら、もっと身近なエネルギー変換をすでに実施されている学校もあるかもしれない。今回、提案の場を頂いたことで山武郡市の技術部会の先生方と話し合ったり、知恵を出し合ったりしたことで出たアイデアであることから、今後も改良、応用していきたいと考えている。

生徒たちは、この教具を利用した授業に意欲的な態度で臨んでいた。率先して意見を述べる姿勢や、真剣に自分の考えをイメージ図として描いている姿を見ると、この教具を作ったことはよかったと思う。

生徒一人一人がしっかりと思考し、学び合いをおして、表現することで深い理解につなげるだけでなく、他教科（社会科、理科等）での「持続可能な社会」に関する学習にも横断的につながっていくと考え、継続的に研究をすすめていきたい。

人とのつながりを実感し、心豊かな生活を目指す

— 幼児との関わりを通して —

千葉県習志野市技術・家庭科教育研究会
習志野市立第四中学校 教諭 永野 瞳

1 はじめに

今、幼児を取り巻く事件が後を絶たない。本来健全に育つ場所である家庭において、愛情をもって育てられるべき幼児が、保護者らによる虐待を受けている。その背景には、「育児能力のない家庭」や「子を育てられない大人」、「褒められることを知らない大人」の増加が関係しており、それが社会的に懸念されていることも事実である。子どもの成長の過程において、人との触れ合いを通じた温もりを感じ、人とのつながりを実感することは言うまでもない。しかし、ICT機器の普及により、むずかる幼児にスマートフォンやタブレットを与えれば、言葉をかけたり触れたりしなくても簡単に幼児をあやすことができってしまう。このことは、今後、親（家庭）から子への生活文化の継承や家族間の健全な精神的つながりが希薄になっていくことが予想される。実際に日本小児科医会は「スマホに子守りをさせないで!」というポスターやリーフレットで、幼い子どもとよりよい関わり方について親（家庭）に啓発している。さらに人工知能「AI」の出現により、これからの生活は以前にも増して、人を介することなく生活できるようになってくる。2022年には成人の年齢が18歳に引き下げられるという時代の流れの中で、成長過程にある生徒には早い段階から「生き方」を伝えていく必要があると強く感じる。少子高齢社会の中でも、家族、地域の人々、高齢者、障害をもった人、そして幼児等々といった、すべての人々とのつながりによって自分の成長や生活が営まれている。生徒には、幼児について知り、触れ合うことで、人との関わり方を学び、自分も家庭生活や社会を支える一員であるということを感じてほしい。本研究を通して、予測困難な時代において、様々な人々とともに協力・協働し、心豊かな生活を目指す

姿勢を育成したいと考えている。

2 研究のねらい

(1) 生徒の実態

本研究を進めるにあたって、平成30年10月～12月に生徒の実態を把握するためのアンケートによる事前調査を行った。

調査対象：習志野市内公立中学校 全7校
中学3年生 1,342名

図1

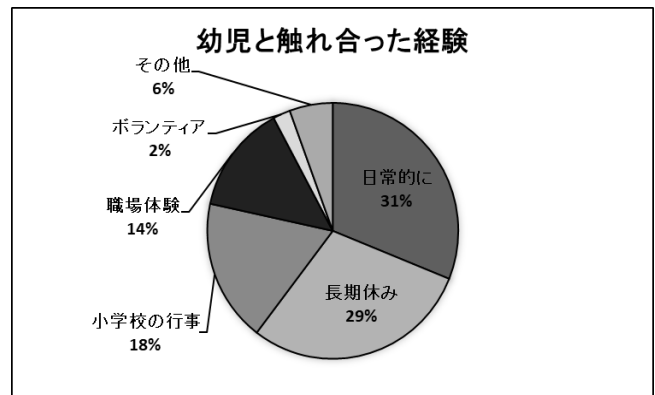


図2

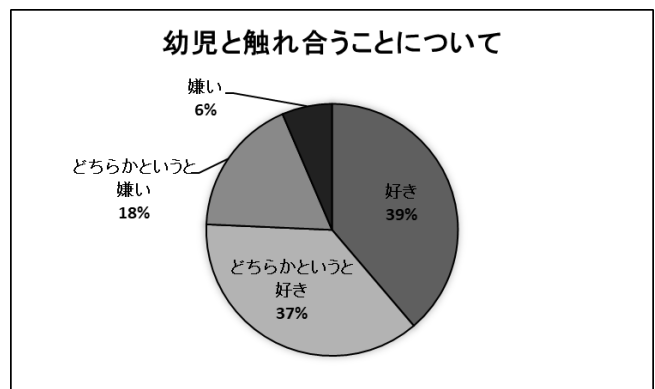
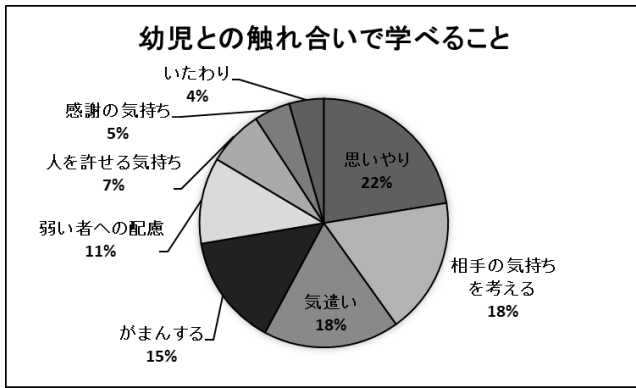


図 3



これらの結果から、生徒は少子化といわれる現代であっても日常的、一時的なものを含めて幼児と触れ合った経験があり(図1)、幼児に対する印象も肯定的に捉えている生徒が多い。一方で、少数ではあるが、幼児と触れ合った経験がなく、触れ合うことにも抵抗を感じている生徒もいることが明らかになった(図2)。また、生徒は幼児との触れ合いから「他者への思いやり」、「相手の気持ちを考える」、「気遣い」、「がまんする」ことを学べると考えていることがわかった(図3)。

(2) 目指す生徒像

- 幼児との触れ合いを通して、様々な人々とのつながりを感じることでできる生徒
- 他者を理解し、家庭や地域社会の一員として協力・協働できる生徒

3 研究仮説

目指す生徒像を実現するために、以下の研究仮説を立てた。

- (1) 幼児の成長について知り、発達に合わせた関わり方を踏まえて実践すれば、様々な人々とのつながりを実感することができるであろう。
- (2) 自分の成長を振り返り、幼児に愛情を持って関われば、積極的に家庭や地域社会と関わろうとする、心豊かな生活を目指すことができるであろう。

4 研究内容

市内公立中学校 全7校において、各校共通の学習の流れ(表1)を基本に、学校の実態と地域の特性に応じた実践を行った。

表 1

学習の流れ (各校共通)		時数
1	自分の成長の振り返り	1
2	幼児の心身の発達	1
3	幼児の生活習慣の習得	1
4	幼児の生活と遊び (幼児の絵本の製作、触れ合い活動のためのネームバンドの製作、 幼児の生活に役立つ物の製作)	10
5	幼児と触れ合う活動の事前指導	1
6	幼児と触れ合う活動	2
7	幼児と触れ合う活動の事後指導	1
8	幼児への手紙・新聞作成(まとめ)	1

(1) 授業実践 I (事前指導：1時間)

ねらい：幼児の行動をイメージして、どのように関わればよいかを考えることができる。

① ICT機器の活用

先の実態調査で得られた、幼児と触れ合う経験があっても、生徒にとって幼児が身近な存在とは限らない。そこで、幼児の発達や行動がわかるDVDの映像や実物投影機で様々な表情の写真を示し、幼児をイメージできるようにした。生徒は幼児の姿にほほえんだり、驚いたり、良い反応を示した。

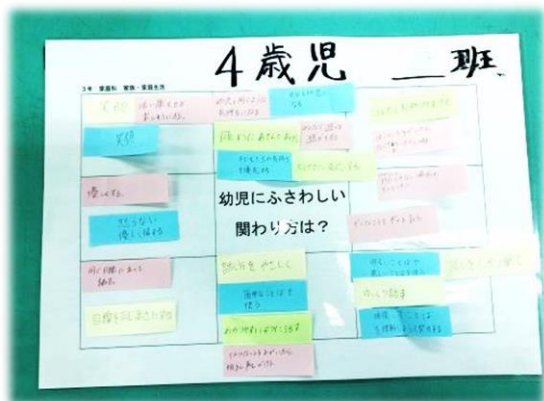
【生徒が抱いた幼児のイメージ】

かわいい・よく動く・活発・元気・よく遊ぶ・小さい・思ったことをすぐに表情に出す・やんちゃ・好奇心旺盛・素直・ひとつのことに全力で取り組む

② 話し合い活動の充実(伝え合う=共有する)

実際に、幼児と触れ合うためには、どのような関わり方をしたらよいかを具体的に考えるために、個々に意見を出し合うマンダラシートを活用した。マンダラシートで自分の意見を伝え、グループの様々な意見を共有して整理しながら、よりよい関わり方について話し合い、考えを深めることができた。

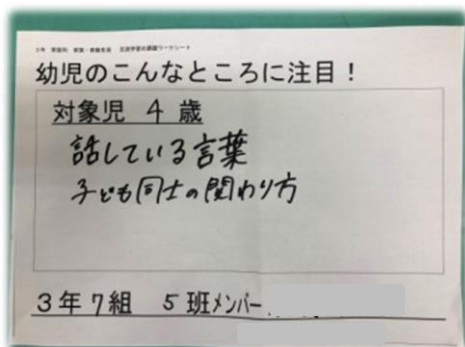
〔マンダラシートの活用〕



③ 課題設定

触れ合う対象年齢ごとのグループで、どのような視点で幼児を観察し、どのように関わったらよいかについて課題を設定した。その結果、幼児がどのような言葉を遣って話をしているのか、幼児同士がどのような関わり方をしているのか等、課題の内容からも、より深く幼児を理解しようとする姿勢がうかがえた。

〔課題設定シート〕



(2) 授業実践Ⅱ (触れ合い学習当日：2時間)

学習課題：幼児と触れ合って、人とのつながりを実感しよう。

生徒は幼児が近づいてくると、はじめは戸惑っていたが、膝をついて姿勢を低くしたり、幼児の話しに相槌を打ちながら、ままごとをしたり、絵本を読んだり、ブロック遊びを始めた。幼児が泣いていたりと困っていたりするとやわらかい言葉かけをするなど、マンダラシートで考えたことを実践することができた。触れ合うことに否定的だった生徒も幼児におんぶをせがまれたり、肩に乗られたりしても、生徒はほほえんで幼児に合わせ、一緒になって楽しんで遊んでいた。幼児の行動に腹を立てたという生徒

は一人もいなかった。生徒は幼児との触れ合いを通して、大人（保護者）や同級生にはない接し方を実践したことにより、人との関わり方を考え、人とのつながりを実感することができた。

〔活動の様子〕



(3) 授業実践Ⅲ (事後指導：1時間)

○触れ合う活動のまとめから

【グループ（私）の課題を受けて
わかったこと・気づいたこと】

- ・ちゃんと敬語を使っているのは、歳の関係に気づいている証だと思う。

(男子：四中)

- ・話すペースが全員同じではなく、速く話す子やそれより遅く話す子がいて、会話するのが少し難しかった。その中で、自分から話しかけてくれる子もいるけれど、そうでない子もいる。例えば、恥ずかしがりの子と仲良くなるには、やはり、視線を合わせて優しい言葉を使って、好きなもの等を聞いたりすることが大切だと思った。どの子も同じではなく、一人一人が個性をもっていて、それにどうやって付き合っていくか、どんな話し方をするか、どんな態度で接するのかを考えることが大切だと思った。

(女子：四中)

生徒は、幼児同士の関わりと中学生と幼児との関わりを通して、人と人がつながっているということ、人が関わる中で大切なのは、人を思う気持ちであるということを実感することができた。また、自分から関わろうとすれば、相手もそれに応え、よりよいつながりがもてることも学ぶことができた。

5 研究の成果と課題

(1) 成果

① 授業実践から

【生徒の感想】

- ・今回の触れ合いを通して、小さい幼児は歩幅も小さい、集中力がなく、あまり同じ遊びを続けていられないということがわかった。笑顔で返してあげると幼児は楽しくなって、どんどん話しかけてくれるということもわかった。また触れ合う機会があったら明るいトーンで話していくことが大切だと思った。

(男子：二中)

- ・幼児と関わることで、人と人とのつながりや人を思う気持ち、今考えていることを予測すること等が体験できた。幼児との関わりは、高齢者とのつながりにも僕は関係していると思う。少子高齢化の時代、僕はこれから、幼児、高齢者を大切にしたい。

(男子：七中)

- ・生徒は事前アンケートの、幼児との触れ合いから学べることとして回答した「思いやり」、「相手の気持ちを考える」等を実感することができた。
- ・生徒の実態を把握し、段階を経て指導していくことで、生徒に幼児（他者）を理解させ、人と人とのつながりを実感させることができた。
- ・幼児との関わりに肯定的ではなかった生徒にも、幼児と触れ合う中で、人の温かさや優しさを感じさせることができた。(生徒の変容)

② 他教科等との関わり

より深い学びへ

～ 持続可能な社会の実現に向けて ～

市内各中学校では、その地域の特色により、教科横断的な取り組みがなされている。これは、各学校で何年にもわたって培われてきた幼児との関わり
の授業が土台となっている。

〔一中〕体育祭

近隣の幼稚園児と生徒（希望者）が、一緒に演目のダンスに参加する。

〔三中〕近隣保育所との合同避難訓練

津波を想定し、3～5歳児全員が中学校の校舎を、中学生と一緒に手をつないで避難訓

練をする。

〔四中〕けやき祭り

授業公開参観や地域の方々が学校に訪れ、音楽集会の合唱鑑賞やバザー等による出店がある。

(2) 課題

① 授業実践から

- ・人と人とのつながりを実感させるためには、段階を経て順序立てて指導していく必要がある。
- ・幼児との触れ合いの学習を、地域の協力を得て今後も継続して行っていく。
- ・協力を得た方々（幼稚園・保育所・こども園の職員や幼児の保護者等）から、取り組みについて成果や課題を聞き取る等して改善を図り、小学校、中学校、高等学校の学習の系統性をもたせることも必要である。

② 他教科等との関連から

- ・学習の意義をより深く理解させるために、他教科の学習内容にも関連付けた指導を行っていききたい。
- ・学校全体として道徳や行事、地域での活動等とも関連付けて、計画をしていく必要がある。

6 おわりに

幼児との関わりを通して、生徒が様々な人々とのつながりを実感し、心豊かな生活を目指すことを主題として本研究を進めてきた。本研究を通して、生徒は自分自身の成長にも、人と人との関わりが大切であるということを実感できた。地域はもとより、家族との関わりも十分とは言えない現代の生徒に必要なのは、人の直接的な温かさに触れること、心の通ったつながりを感じながら生活していくことである。人と人とのつながりを感じることで、家族を大切に、周囲の人々を大切に思うことができる。そして、生徒自身も相手から大切にされていることを実感することで、心豊かな生活を目指していけると考える。これから生徒一人一人が家庭の一員、地域社会の一員として、様々な人々と協力・協働して生活していくために、何年にもわたって本市で培ってきた「幼児との触れ合い学習」を、生徒の実態や地域、時代に合わせて工夫しながら今後も継続していくことが重要だと考える。

3 各部活動報告

(1) 研究部

1 活動内容

- ・千葉県教育研究会技術・家庭科教育部会における研究推進
- ・各支部における研究協力及び研究支援
- ・各支部における研究成果を集約した「研究のまとめ」の発行

2 活動日程

令和元年

5月14日(火)	第1回役員研修会
6月28日(金)	千葉県教育研究会技術・家庭科教育部会研究大会市川・浦安大会並びに 総会・作品展(市川市立第六中学校, 千葉県立現代産業科学館)
7月4日(木)	第2回役員研修会
9月24日(火)	第1回「研究のまとめ」編集会議
10月2日(水)	第3回役員研修会
11月8日(金)	千葉県中学生創造ものづくり教育フェアに向けた役員研修会
12月14日(金)	第2回「研究のまとめ」編集会議
1月10日(金)	第3回「研究のまとめ」編集会議及び令和6年度関ブロ千葉大会全体研 究主題検討会議
1月24日(金)	第4回「研究のまとめ」編集会議
2月14日(金)	第4回役員研修会

3 取り組みについて

昨年度より、予算削減の関係で研究の成果をまとめた「研究のまとめ」を製本から Web ページ掲載に変更している。今後は多くの教員が閲覧し活用できるよう、広報を工夫していきたい。

令和6年度関ブロ千葉大会に向け、全体研究主題の検討を行った。次年度の決定に向けて計画的に取り組んでいきたい。

4 課題

- ・令和3年度全面実施される学習指導要領の実践に向け、各支部の研究活動に積極的に関わり、支援していく。
- ・学習指導要領の改訂に伴って変更される、指導要録の評価の観点のあり方について各支部で計画的に検討し、対応していくように促していく。

(2) 情報部

1. 情報部の活動内容

千教研技術・家庭科部会の Web ページ (GI☆KA CHIBA) の管理・更新を主な活動とする。

(1) 各支部のページについて

- ① 各支部からの更新データ (題材例など) について, 登録 (更新) とメニューへのリンクを行う。また, 要請に応じて各支部 Web ページ作成の支援を行う。
- ② 支部ページのデータ収集やページの作成, 更新データの送付は各支部の責任で行う。

(2) その他のページについて

- ① 主催・共催行事等の案内を中心に, 各部・事務局からの要請により, 部員や県外の先生方への情報提供を行う。
- ② 県総会, ものづくりフェアなどの開催の様子について取材し, Web ページ上で報告する。

2. 活動日程

- (1) 5月14日 (火) 第1回役員研修会
- (2) 6月 7日 (金) 各支部 Web 担当者とりまとめ
- (3) 6月28日 (金) 定期総会及び研究大会・作品展取材
- (4) 7月 4日 (木) 第2回役員研修会
- (5) 8月 2日 (木) 各支部 Web ページ担当者研修会
- (6) 10月 2日 (火) 第3回役員研修会
- (7) 11月 9日 (土) 県ものづくり教育フェアでの取材及び Web ページへの掲載
- (8) 2月 14日 (金) 第4回役員研修会
- (9) 2月 15日 (土) 木工工作作品展取材及び Web ページへの掲載

3. Web ページの更新について

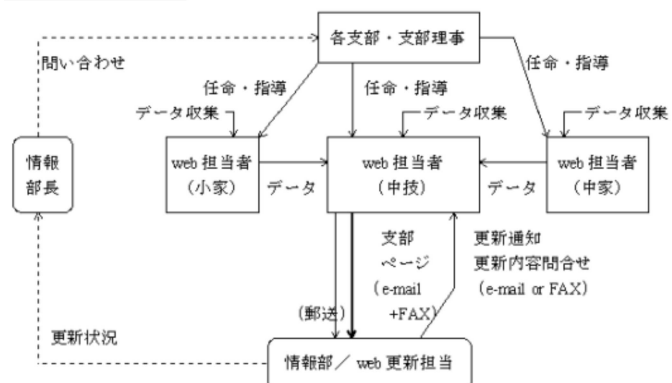
(1) 各支部ページの更新について

- ・支部ページは支部理事の責任で更新する
- ・Web 担当者は, 支部理事の指導のもとに年1回以上の更新を行う。
- ・支部トピックス (支部の紹介話題, 取組等) でデータを充実させる。
- ・他県や他支部に紹介する題材例の掲載。
- ・指導上有効な教具などについても積極的に掲載していく。



各支部のページ作成に関するお願い

○データの流れ



(2) その他のページの更新について

- ・他部門の要請があれば専用ページを作成する。
- ・トップページを中心に、「ものづくりフェア」や研究大会等の情報を随時更新する。
- ・過去の研究大会における指導案を記録する「指導案アーカイブス」の準備を進める。

(3) 課題

新学習指導要領に適合した、Web ページの修正が数年来の課題である。研修会などを通じて、内容の再確認をお願いしているが、支部から発信されている情報の修正（旧指導要領下の題材例など）がなかなか進まないのが現状である。

また、各支部ページの更新を年1回以上お願いしているが、残念ながら Web ページ更新データを送付いただけなかった支部が多くあった。技術的に Web ページ更新が難しい支部等があれば、個別に対応可能である。

各支部 web ページ用データの送り方（随時登録・更新）

○ gikachiba.jyoho@gmail.com（千教研情報部専用アドレス）

4. 今年度を振り返って

これまで同様、県総会、ものづくりフェアなどについて、開催の案内から開催の報告まで、事務局や中学校部などと連携して、積極的で確実な情報発信に努めることができた。発信方法や内容について、情報部側から提案することもあり、部会内各部の連携が図れている良い例ではないかと自負している。

今後もより一層（GI ☆ KA CHIBA）の充実を図るために、各支部 Web ページ担当者や支部理事との連絡を密にして、製作を進めていきたい。また、研修会の折に支部の web 担当者の方々からいただいたアイデアを実現する努力をしていきたい。

【令和元年度情報部】

部長	濱田 勝久	所属	千葉市立幕張西中学校
部員	七戸 亮太	所属	船橋市立八木が谷中学校
部員	藤田 伸平	所属	東庄町立東庄中学校
部員	菅 整	所属	千葉市立大椎中学校
部員	君塚 久美	所属	千葉市立美浜打瀬小学校

(3) 中学校部

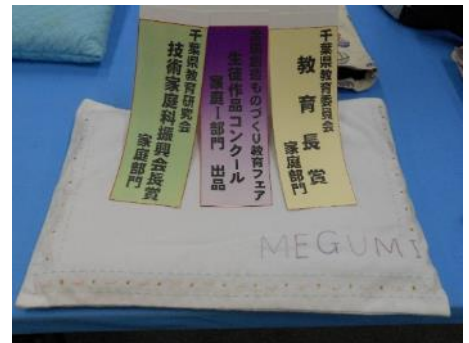
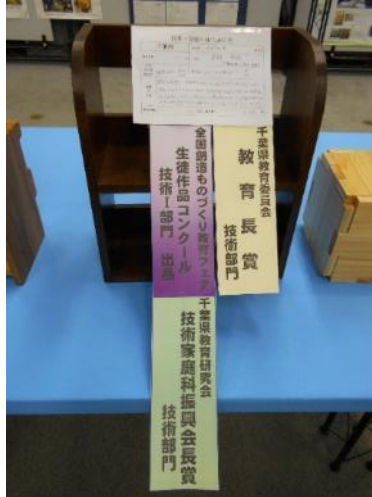
① 令和元年度千葉県中学校技術・家庭科作品展（6月28日 現代産業科学館）

「令和元年度千葉県教育研究会技術・家庭科教育部会研究大会並びに定期総会」の開催に合わせて、千葉県立現代産業科学館にて開催しました。各分野の優秀な作品に対して、特別賞（千葉県教育委員会教育長賞、千葉県教育研究会技術・家庭科振興会長賞）を与えるとともに、在校生作品を全国フェア、関東甲信越大会へ出品しました。

令和元年度 千葉県中学校技術・家庭科作品展 入賞者一覧 ※年は今年度の学年

No.	分野	特別賞	出品先	支部	学校名	氏名	作品名	年
1	技術	教育長賞	全国	長生	茂原市立東中学校	米岡 玲菜	オリジナル小物入れ	2
2	技術	振興会長賞	全国	安房	南房総市立嶺南中学校	長谷川 友菜	マルチラック	2
3	技術	振興会長賞	全国	市川	市川市立福栄中学校	新田 愛莉	本立て	2
4	技術	振興会長賞	全国	君津	木更津市立木更津第三中学校	佐野 あすか	幼児のための木材パズルと小箱	2
5	技術	振興会長賞	関東	香取	香取市立佐原中学校	今泉 宗一郎	本立て	2
6	技術	振興会長賞	関東	習志野	習志野市立第二中学校	田中 優輝	木製のイス	3
7	技術	振興会長賞	関東	君津	君津市立周西中学校	長谷川 優葵	本立て	2
8	技術	振興会長賞		千葉市	千葉市立花見川中学校	田中 祥太	文鎮	卒
9	技術	振興会長賞		船橋	船橋市立船橋中学校	田邊 拓也	本立て	2
10	技術	振興会長賞		千葉市	千葉市立草野中学校	江尻 稀央	PC収納付本立て	2
1	家庭	教育長賞	全国	印旛	八街市立八街中央中学校	織田 恵美	防災頭巾	3
2	家庭	振興会長賞	全国	船橋	船橋市立宮本中学校	大澤 千夏	移動教室用ノート BAG	2
3	家庭	振興会長賞	全国	長生	茂原市立南中学校	中村 舞	あいうえおで遊ぶカルタ	3
4	家庭	振興会長賞	全国	千葉市	千葉市立小中台中学校	桑原 史華	ぶどう染めの車椅子グッズ	3
5	家庭	振興会長賞	全国	千葉市	千葉市立小中台中学校	須田 夏生	防災リュック	3
6	家庭	振興会長賞	関東	東葛飾	柏市立柏第二中学校	岩田 梨乃	トートバッグ（裏布付）	3
7	家庭	振興会長賞	関東	山武	横芝光町立光中学校	越川 優花	防災ずきん	2
8	家庭	振興会長賞	関東	市川	市川市立妙典中学校	渡辺 陽	トートバッグ	3
9	家庭	振興会長賞		八千代	八千代市立大和田中学校	今井 穂香	刺し子ランチトートバッグ	2
10	家庭	振興会長賞		夷隅	いざみ市立国吉中学校	板倉 くるみ	ファイルカバー	2
11	家庭	振興会長賞		習志野	習志野市立第四中学校	齋藤 すず	布絵本	卒
12	家庭	振興会長賞		市原	市原市立市原中学校	向井 理子	トートバッグ	3
13	家庭	振興会長賞		君津	君津市立小糸中学校	水野 涼葉	トートバッグ	3

【特別賞に輝いた作品】



【教育長賞受賞作品】

オリジナル小物入れ：米岡さん
防災頭巾：織田さん

② 第16回千葉県中学生創造ものづくりフェア（11月9日 総合教育センター）

(ア) めざせ！「木工の技」チャンピオン

木材加工の基礎的・基本的な技能を競うために、今年度は14名の生徒が参加し、「状差し」の製作を行いました。優勝した佐野あすかさんは2年連続の優勝になり、2年続けての全国フェアへ出場しました。



- 1位 木更津市立木更津第三中学校 佐野あすか（県知事賞）
『全国フェア出場』
- 2位 船橋市立行田中学校 神谷 晴子（県会長賞）
- 3位 市原市立ちはら台南中学校 古屋 和響（県会長賞）

(イ) ロボットコンテスト

応用部門に7チーム、活用部門に13チーム、基礎部門に24チームが参加しロボットの性能と操作技術を競い合いました。全てのチームの中から1チームが『ロボコン大賞』に選出されました。また、各部門からは、優勝・準優勝チームと審査員特別賞に選出された1チームが関東フェアに出場を果たしました。



【ロボコン大賞】 千葉市立おゆみ野南中学校 “Oyumino-A”（県知事賞）

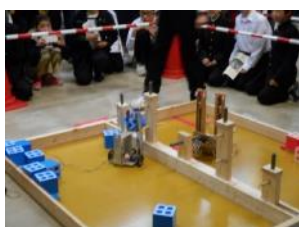
基礎部門

- 1位 流山市立東深井中学校
“正方形”
- 2位 流山市立東深井中学校
“チーム廃品回収”
- 特別賞 習志野市立第一中学校
“チーム名”（以上、関東大会出場）



活用部門

- 1位 千葉市立小中台中学校
“リベンジャーズ”
- 2位 千葉大学教育学部附属中学校
“chizuchizu.com”
- 特別賞 千葉市立小中台中学校
“みりん改”（以上、関東大会出場）



応用部門

- 1位 野田市立北部中学校
“野田北部中A”
- 2位 千葉市立おゆみ野南中学校
“Oyumino-A”『関東大会敢闘賞』
- 特別賞 習志野市立第一中学校
“疾風 Ver. R”（以上、関東大会出場）



(ウ) 「豊かな生活を創るアイデアバッグ」コンクール

決められた大きさの布でポケットやスナップ等と様々な工夫を凝らしたバッグを製作する競技に今年は 23 名もの多くの生徒が参加しました。上位 2 名の米本みれさん、白幡さんが関東フェアへ参加しました。



- 1 位 御宿町立御宿中学校 米本 みれ (県知事賞) 『全国フェア出場』
2 位 松戸市立六実中学校 白幡 晴香 (県会長賞)
3 位 松戸市立六実中学校 福島 舞桜 (県会長賞)

(エ) 「あなたのためのおべんとう」コンクール

39 チームが参加しました。事前のレポート審査を通過したチームが、フェア当日に総合教育センター調理室で、腕を競い合いました。その結果、1 位の幕張西中学校チーム (邨田主海さん・青木奎亮さん・福原将太さん) が全国フェアへ出場しました。



- 1 位 千葉市立幕張西中学校 邨田 主海・青木 奎亮・福原 将太
(県知事賞) (キックマンおいしい記憶賞) 『全国フェア出場』
2 位 千葉市立葛城中学校 青柳 陽花・木村 柚喜・阿部 結音
(県会長賞)
3 位 千葉市立葛城中学校 宇枝 桃花・庄司 愛梨
(県会長賞)

学校給食会理事長賞 千葉市立泉谷中学校

秋葉 美南・神山 実織・サマー ジュエル ローズ

東京ガス エコ・クッキング賞 千葉市立葛城中学校

片桐 柑花・小倉 結衣

学校賞 木更津市立太田中学校

千葉県学校給食会レポート賞 千葉市立蘇我中学校 坂本 潤・長野桜季

東京ガスエコクッキングレポート賞 千葉市立蘇我中学校 黒崎真愛・宮崎めい

千葉市立蘇我中学校 高橋天音・大岩絢衣

キックマンレポート賞 千葉市立蘇我中学校 三島 彩・大塚亜未香

入選 佐倉市立志津中学校 井口小菜・上山菜々果・松浦陽菜

四街道市立四街道西中学校 芹澤彩良・木村彩乃・加藤小春

四街道市立四街道西中学校 上野みずき・向井彩華

四街道市立四街道西中学校 小野寺星羅・大塚日愛

木更津市立太田中学校 栗野 萌 ・渡辺千穂

<ものづくりフェアの様子>

【開会式】



【木工の技】



【ロボコン・基礎】



【ロボコン・活用】



【ロボコン・応用】



【ロボコン・プレゼンテーション】



【アイデアバッグ】



【おべんとう】



<各支部の参加状況>

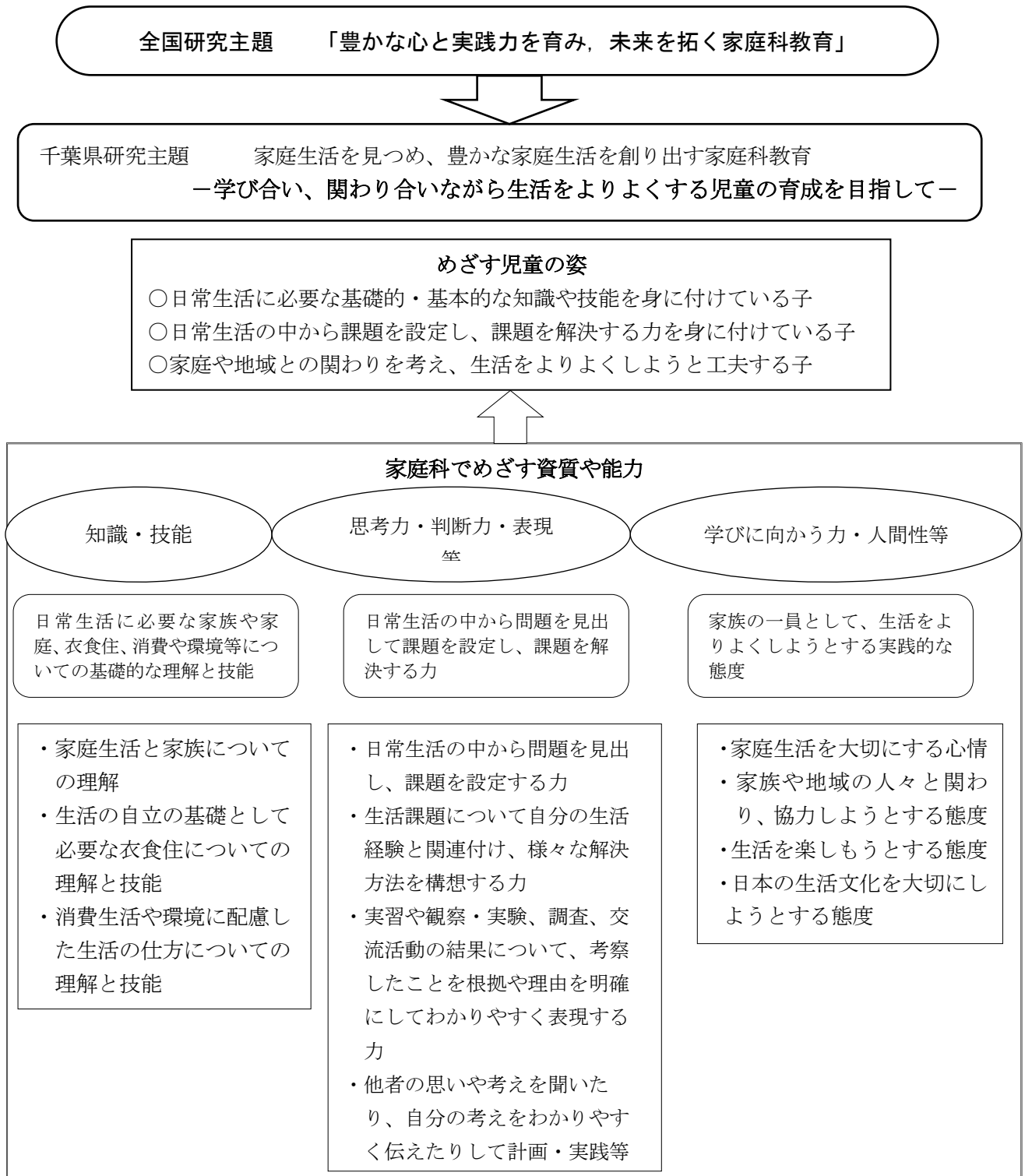
No.	支部名	木工		ロボット 基礎部門			ロボット 活用部門			ロボット 応用部門			バッグ		お弁当		
		学校数	生徒数	学校数	チーム数	生徒数	学校数	チーム数	生徒数	学校数	チーム数	生徒数	学校数	生徒数	学校数	チーム数	生徒数
1	千葉市	2	3	1	4	14	3	8	32	1	4	22	1	1	4	11	26
2	市原	1	1														
3	習志野	1	2	1	1	4	1	1	4	1	1	6	1	2			
4	八千代												1	1			
5	船橋	1	3	1	2	6	1	2	8								
6	市川												3	3			
7	浦安																
8	東葛飾	1	1	4	11	27	1	2	7	1	2	12	2	5	1	1	3
9	印旛	1	2	1	6	20									3	13	35
10	香取																
11	東総																
12	山武																
13	長生																
14	夷隅												1	2			
15	安房																
16	君津	1	1										2	8	1	14	35
	合計	8	13	8	24	71	6	13	51	3	7	40	11	22	9	39	99

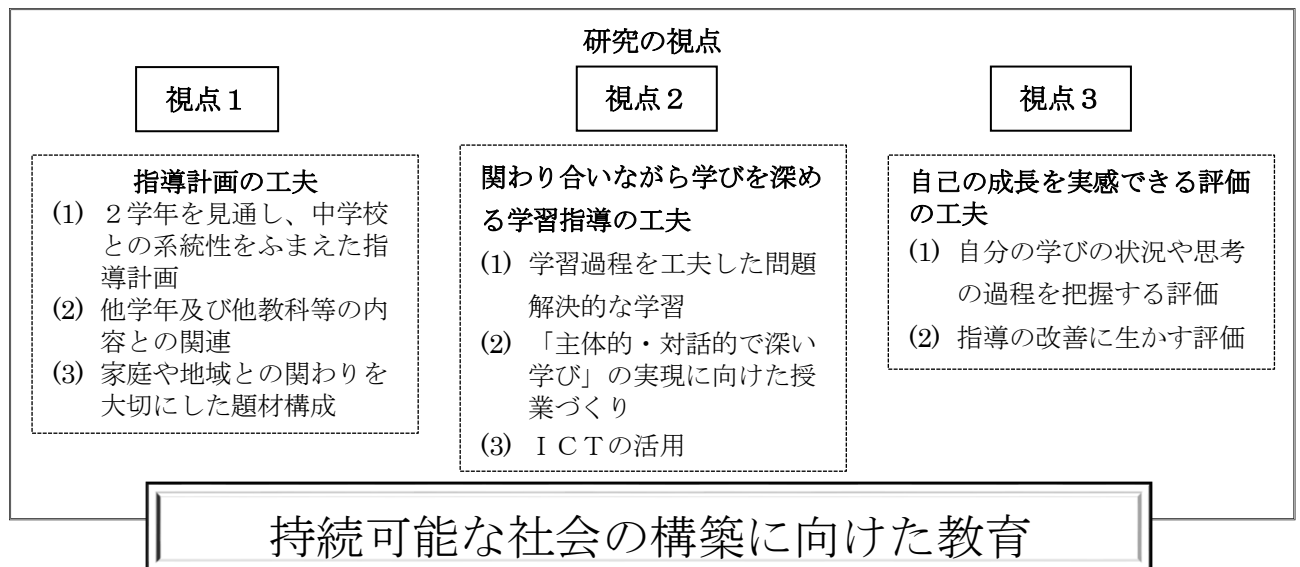
(4) 小学校部 (支部数 12 会員数 114人)

千葉県小学校家庭科教育研究会 活動概要

本年度は、令和2年11月に千葉市立美浜打瀬小学校で行われる「第37回千葉県小学校家庭科教育研究大会千葉大会」へ向け、授業研究を行った。また、「新しい家庭科教育」について、県の指導主事 田邊暁子先生を講師として研修を行った。

1 研究の概要





2 本年度の活動

- 4 月 20 日 (土) 事務局会 総会準備 (千葉市立幸町第三小学校)
- 5 月 10 日 (金) 全小家研理事会・関プロ理事会 (国立オリンピック記念青少年センター)
- 5 月 14 日 (火) 事務局会 総会準備 (千葉市立幸町第三小学校)
- 5 月 22 日 (水) 事務局会 総会準備 (千葉市立幸町第三小学校)
- 6 月 19 日 (水) 総務会・第 1 回役員総会研修会 (ポートプラザちば)
- 10 月 24 日 (木) **小学校家庭科授業校内研究会 (千葉市立美浜打瀬小学校)**
- 11 月 1 日 (金) 第 35 回関東甲信越地区小学校家庭科研究大会新潟大会 (三条市立嵐南小学校)
- 11 月 7 日 (木)・8 日 (金)
第 56 回全国小学校家庭科教育研究会全国大会 (熊本大会)
(熊本市立託麻原小学校、春日小学校、くまもと森都心プラザ)
- 12 月 14 日 (土) 事務局会 総会準備 (千葉市立幸町第三小学校)
- 2 月 19 日 (水) 県小家研だより発行
- 2 月 19 日 (水) 総務会・第 2 回役員総会研修会 (ポートプラザちば)
- 2 月 27 日 (木) 関東地区理事会 (上野)
- 3 月 全小家研アンケート終了
総務会・会計監査・次年度計画

3 成果と課題

- 本年度は、第 1 回の役員総会・研修会で、県の指導主事の先生から具体的な学習指導要領の改訂点などをお聞きすることができ、よい研修となった。
- 昨年度、充実した関プロ千葉大会を終え、今年度は次年度 11 月に千葉市で行われる県大会に向け、研究を進めてきた。10 月に千葉市立美浜打瀬小学校で行われた授業研究には、県からも多くの役員が参加し、充実した研究会となった。
- 研究の面では、学習指導要領の改訂並びに移行期ということで、千葉県、並びに県内各支部の取組を充実させていく必要がある。
- 次年度の大会に向け、更なる組織の強化と研究を進めていく必要がある。

4 各支部活動報告

(1) 千葉支部 (学校数：55校 会員数：技術科44名, 家庭科40名)

技術分野

1. 千葉支部研究主題

よりよい生活や持続可能な社会の構築を目指して、
生活を工夫し創造する実践的な態度を育成する技術・家庭科教育の在り方
～見方・考え方を働かせる学習を通して～

2. 主題設定の理由

千葉市支部(技術分野)では、本教科の目標にある「よりよい生活」を実現するために、社会で求められている「持続可能な社会」の構築について学校教育ができることを視点に学習内容の在り方について研究を進めたいと考え、主題を設定した。

学習への関心・意欲の向上や学習した内容を生活に活かすことができるよう、生徒にとって身近であると感じられる題材を設定し、生活に取り入れられるような授業展開の工夫をした。生徒が必要な知識、技能を身に付けつつ、「技術の活用」が進められるような技術・家庭科教育の在り方の研究を目指した。

3. 研究の概要

(1) 研究仮説

【仮説1】3年間を見通し、環境との関連が図れる題材を系統的に配列すれば、技術の見方・考え方を働かせて課題を解決する力の基礎となる知識・技能の定着が図れるだろう。

【仮説2】実践的・体験的な学習活動の中で、意図的に環境に関連させた学習の場面を増やせば、現代的な課題に対する「技術的な課題解決力」が身につくであろう。

【仮説3】生徒を惹きつける題材や学習過程の工夫を図れば、学習に対する成就感・達成感が高まり、実践的な態度が身につくであろう。

(2) 仮説の検証

①仮説1について：内容Cについて、作物を栽培する際の容器に3Rを意識したペットボトルの再使用などを取り入れて学習を進めた。また、各内容のまとめとして、環境とのかかわりを意識した技術の具体的な評価・活用の方法について考えられるよう指導計画を立てた。

②仮説2について：内容Cにおいて、作物を栽培する際に、生育状況に合わせて栽培計画を立て、環境負荷を少なくしながら作物をより大きく生育するための方法について考察させ、生徒の関心や意欲を高めるとともに、学習内容をより深く理解することができると考えて授業展開し、検証を行った。

③仮説3について：内容Dにおいて、プログラミングのPDCAサイクルの中に、他者評価の学習過程を取り入れることで、様々な意見を取り込みより良い作品をつくれる授業展開を工夫した。

4. 成果と課題

(1) 生物育成の収量を多くする方法を考察する授業では、家庭でできる省エネや3Rを生徒自ら考えることができた。さらに意見交換することで、個人個人の考えが深まったり、視野が広がったという感想が得られた。

(2) 生育状況に合わせて栽培計画を立て直し、作物をより大きく生育するための方法について繰り返し考察させることで、小課題をクリアし自信をつけ、より良い作物を育てたいという意欲を高めることができた。

(3) 小学校のプログラミング学習との連携、新学習指導要領に対応した指導計画の工夫が今後の課題である。

家庭分野

1. 千葉支部研究主題

生活や技術を工夫し創造する実践的な態度の育成

2. 主題設定の理由

技術・家庭科では、社会の変化に主体的に対応する力や、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造する力の育成を目指している。そのためには、生徒自身が自己の現在や将来を考え、よりよい生活を追求していく力を培うことが必要である。現在、社会の急激な変化や科学技術の著しい進歩に伴って、人々のライフスタイルも多様化している。このような状況の中で、多様な意見を取り入れることで、よりよい生活を目指していこうとする意識を高めていきたい。生活上の課題に対して自ら判断し、課題を解決するためにも、多様な意見に触れ、物事を多角的にとらえる力を培うことが求められている。今年度は、話し合い活動を取り入れた問題解決的な学習について研究を進めた。

3. 研究の概要

(1) 研究の視点

研究テーマを解明するために、研究の視点を立てた。

- ①家庭分野における持続可能な社会のとらえ方
- ②話し合い活動の工夫
- ③問題学習的な学習の取組

今年度は、②と③に重点を置いて研究を進めた。

(2) 研究の計画・実践

- 4月 年間計画 (蘇我中学校)
- 5月 指導案検討 (稲毛中学校)
- 6月 授業実践「食品の保存について見直し、どう工夫すればよいか考えよう」
稲毛中学校 星 麻希 教諭
- 8月 被服実習の教材研修 (新宿中学校)
- 9月 指導案検討 (椿森中学校)
- 10月 授業実践「意見交換を通して、自分や家族の消費生活について取り組むべきことを考えよう」
- 11月 被服実習の教材研究 (新宿中学校)
- 1月 今年度のまとめ・次年度への展望 (椿森中学校)

4. 成果(○)と課題(●)

- 自分の考えに近い意見から反対の意見まで、幅広い考えに触れることで、多様な考えを持ち、物事を多角的にとらえる力を培うことにつながった。
- 実際の生活に即した資料や教材を準備することで、生徒が主体的に問題解決的な学習を進めることができた。さらに、学習した内容を自身の生活に取り入れ、工夫していこうとする態度を育むことにつながった。また、視覚的な教材によって生徒の興味関心を引き、話し合い活動を活発にすることができた。
- 多くの資料や情報を用意したが、それらを整理するために時間がかかった。話し合いや課題の解決方法について考えるための時間を確保するために、ねらいに沿った情報に精査する必要があるがあった。
- 他の分野においても話し合い活動を取り入れ、生徒の経験を増やし、より活発な話し合い活動につながるよう指導計画を工夫していきたい。

(2) 市原支部

(学校数 22校 会員数 技術科 11名 家庭科 13名)

1. 市原支部研究主題

「生活や技術を工夫し創造する実践的な態度の育成」
～主体的・対話的で深い学びを通して～

2. 研究及び活動の概要

これまでの研究の過程

平成29年度、技術・家庭科部会では「よりよい生活や社会の実現に向けて、自ら課題を見つけ、解決する力を育む学習指導の在り方」という研究主題を設定し、千葉県教育研究会技術・家庭科研究大会（市原大会）を国分寺台中学校で開催した。急速な社会の変化に対応するためには、自ら課題を見つけ解決できる力を身につける必要がある。人に言われたことを進んで取り組む姿勢だけではその力をつけることはできない。必要なことを自分で判断して取り組む姿勢、いわゆる「生きる力」を育むためには「何を学ぶか」「どのように学ぶか」という視点で学習指導の在り方の研究を行った。技術科ではタブレットを活用し、かんなの使い方を発表するという授業、家庭科では、地域の食材と食文化についての授業を発表した。また、学習指導要領の改定により、小学校での情報教育・プログラミング教育の必修化に向けて、小中連携の観点から、中学校技術科部会として、小学校でのプログラミング教育をサポートするという提案を行った。実際に、国分寺台地区で一昨年度は試行的に中学校の技術科教員が、同地区内の小学校で数時間プログラミングの授業を実施した。今後は、この小中連携をどのように市内全域に広げていくかが大きな課題であるが、中学校技術科の存在価値を高める上でも効果的な小中連携事業となる可能性を秘めていると考える。研究大会でも、この研究実践への関心が高く、多くの参加者から高評価を頂く事ができた。

3. 本年度の研究、活動内容

月	日	曜日	おもな活動内容
4	25	木	定例集会（国分寺台中学校）年間計画、組織づくり
6	3	月	定例集会（国分寺台中学校）提案レポート検討、情報交換
6	28	金	千葉県教育研究会 技術・家庭科研究大会（市川市第六中）
8	2	金	定例集会（八幡中学校）中学校技術・家庭科実技研修会
8	22	木	定例集会（国分寺台中）提案発表
10	24, 25	木、金	関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会（茨木県） ※今年度は資料参加
11	2	土	千葉県教育研究集会（千葉市）
11	9	土	千葉県中学校創造ものづくりフェア（総合教育センター）
11	21	木	定例集会（辰巳台中学校）授業研究
1	18, 19	土、日	市原市小中学校技術家庭科作品展覧会（アネッサ）
2	15, 16	土、日	千葉県木工作品展（千葉市きぼーる Qiball）

- (1) 4月25日 《定例集会》
- ・本年度の研究主題及び研究計画の決定
 - ・研究組織および、提案者の確認
- (2) 6月3日 《定例集会》
- ・令和元年度の「千葉県教育研究集会」に向けて、レポートの検討
 - ・県作品展への出品予定の生徒作品を集約 ・情報交換
- (3) 6月28日 《千葉県教育研究会 技術・家庭科研究大会・定期総会・作品展》
- ・「生活や技術を工夫し想像する思考力・判断力・表現力を育成する学習指導の在り方～主体的・対話的で深い学び～」(市川市立第六中学校・千葉県現代産業科学館)
- (4) 8月22日 《市原市教育研究集会》
- 【研究発表】 発表者：赤井貴洋(市原市立五井中学校)
助言者：関口明快 指導主事(南房総教育事務所)
- 【研究テーマ】 様々な材料の加工方法の学習～環境に配慮したものづくりをめざして～
- (5) 11月21日 《定例集会》
- ・授業研究 家庭科 指導者 神田瑞紀(辰巳台中)
 - ・今年度の活動の反省
 - ・来年度の組織について
 - ・技術・家庭科作品展に向けて

4. 成果と今後の課題

【成果】

- ・栄養教諭も部会に複数参加して頂き、家庭科の食に関する指導などで、教員と知識や指導経験の共有を図ることで、今後の進展が期待される。
- ・一昨年度の県研究大会の成果を受け、今年度はじっくりと新たな研究をスタートする年度となった。部会内では、まずは、個人研究の充実を図っていくことを確認した。
- ・中学校技術・家庭科作品展の審査を、昨年度から部会員の主要メンバーで行っている。県作品展に出品する予定作品の選考を兼ねていることから、明確な基準で優秀作品を選考できた。

【今後の課題】

- ・部会の人数が年々減ってきている、免許を持っている先生への部会への参加を促したい。
- ・技術分野のプログラミング教育に関して、小学校と連携を市内全体で進めていく必要がある。教育センターで研究員として研究をスタートした技術部会のメンバーを中心に、小学校でどのようにプログラミング教育を推進していくかが大きな課題である。
- ・昨年度、作品展の会場を変更した。会場が狭いという課題に対して、出品作品数を制限する対応をとった。今年度は昨年度の反省を生かし展示会場の部屋を変更した。今後は、運営面で支障が出ないように計画を進めていく。

(3) 習志野支部

(学校数中学校 7、小学校 16、会員数 技術科 7名・家庭科 7名・小学校家庭科 2名)

1. 習志野支部研究主題

学びを生かし豊かな生活を創造する技術・家庭科教育
～体験的な活動を通し、実践力を育成する指導を目指して～

2. 主題設定の理由

技術・家庭科では、「生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能の習得を通して生活と技術のかかわりについて理解を深め、進んで生活を工夫し創造する能力と実践的な態度を育てる」ことが目標として掲げられている。また、「家族と家庭に関する教育の充実」「食育の推進の観点から食事の役割や栄養・調理に関する内容の充実」「ものづくり教育の充実等の観点から技術の評価、エネルギー変換や生物育成の技術に関する学習の充実」といった内容の改善について示されている。このように技術・家庭科教育では、今まで以上に社会の変化に対応できる能力の育成が求められている。

社会の急激な変化や情報過多の中で、授業の中で生徒の学習結果がすぐに生きて働く力にはなりにくい今日、知識・技能の習得とともに問題解決に向けて見通しをもって取り組む力をつけていくことの重要性が浮かびあがってきた。生徒が問題にぶつかったとき、自らの力でその問題を解決するためには、問題を分析し、その解決方法を考え、解決に向けて取り組む意欲が持てるかどうかにかかってくる。授業において、生活の様々な場面で生徒が直面する課題を解決するための学習内容の充実と工夫は不可欠であり、学習した内容を積極的に日常の生活に生かし、問題解決能力を高めていくことができるように指導していくことが重要であると考え、この研究主題を設定した。

3. 研究の概要

(1) 研究計画

回	月 日	内 容	会場
1	4月25日	令和元年度活動計画立案、会員確認、研究内容の検討	第七中
2	5月21日	小学校家庭科「小物の製作」指導案検討	津田沼小
3	6月18日	小学校家庭科「小物の製作」授業研究 講師 船橋市立丸山小学校校長 井川先生	津田沼小
4	8月20日	実技研修 中学校技術分野「木製品の製作」 「3Dプリンタ、プログラミング」 中学校家庭分野「食に関する指導法」 「高齢者との関わり・介護」	船総セ
5	9月17日	中学校家庭分野「消費者の権利と責任」指導案検討	第六中
6	10月15日	中学校家庭分野「消費者の権利と責任」授業研究 講師 船橋市立丸山小学校校長 井川先生	第六中
7	1月28日	研究のまとめ 次年度の計画	第七中

(2) 研究内容

① 小学校家庭科授業研究「小物の製作」

時 配	学習内容と活動	学習 形態	教師の指導・支援 評価項目・評価内容・留意点
10	・裁縫用具の安全な使い方について確認する。 ・ネームプレートの作り方を確認する。	一斉	・前時までの復習をする。 ・なみ縫いのしかたを確認する。 ・製作の順序とポイントを板書し、わかりやすく示す。

25	・ネームプレートを製作する。	個人	・縫い方のわからない児童には掲示物や拡大投影機を使って説明する。
10	・縫い方や気づいたことを話し合わせる。	一斉	・作品を見せながら気づいたことを説明する。

・児童は製作活動によく取り組んでいた。用意された資料や、拡大投影機を使って手元や作品を提示したところもよかった。

・なみ縫いは、本来は布と布を縫い合わせるもの、フェルトは縫いにくい。本時の目標に対して80～90%が達成できるような計画性が必要である。

②中学校家庭分野授業研究「消費者の権利と責任」

時配	学習内容と活動	学習形態	教師の指導・支援 評価項目・評価内容・留意点
10	・商品の購入場面をもとに、自分ならどうするか考える。	一斉	・商品を購入するときに気を付けることを確認する。
10	【事例1】購入したジュースに異物が入っていた。	一斉	・ロールプレイを通して「権利と責任」についての説明をする。
15	【事例2】購入したバッグがすぐに壊れてしまった。	個人	・班で話し合い、ホワイトボードに記入する。
15	・DVDを視聴し、権利と責任について考える。 ・学んだことをプリントにまとめ発表する。		・商品を購入するときには、「権利と責任」が伴うことを確認する。

・消費者の権利と責任は、理解させるのが難しい内容であるが、生徒はロールプレイや班での話し合い、DVDの視聴などの活動を通して良く学習していた。

・より良い消費生活を目指すために、どのようなことに注意させるか、権利と責任は購入した後だけでなく、購入前の商品の検討などからやっていることである。

・学習課題と活動、学習のまとめまでのつながりを大事にして授業展開をしていくこと、他教科等での学習状況等も考えて指導計画等を作成していくことが今後必要になってくる。

4 成果と課題

(1) 成果

授業展開は年2回、中学校技術分野、中学校家庭分野、小学校家庭科のローテーションで行っている。小・中合同での実施なので、小学校での学習が、どのように中学校で発展してくるのか、小学校他教科での学習が、どのように中学校の授業につながってくるのかを確認することができる。

一人教科なので日常の授業の中で困っていること、新しい教え方などの情報交換、指導方法等に関する意見交換や相談などが活発に行われている。学校で、一人で考えるよりもいろいろな考え方等に触れることができ有意義である。

担当教員の中に若年層の割合が増えてきている。こうした先生方が授業研究を行ったり、ベテランの先生の授業を参観する機会となったり、指導力向上に有効な研修となっている。

(2) 課題

部会に所属するメンバーがほとんど固定している、小学校家庭科の先生の参加が少ない。授業研究日程が毎月6月と10月の第3火曜日と決まっている。特に中学校は10月だと前期、後期の入れ替えの時期になるので、授業展開がしにくい。授業展開の単元がいつも同じところになってしまうなどの課題がある。自主的な研修をさらに充実させるための手立てを検討していきたい。

(4) 八千代支部

(学校数 11校, 会員数 技術科8名 家庭科6名)

1. 八千代支部研究主題

確かな知識と技術を身につけ、学んだことを次の学習や生活に生かすことのできる力を育む指導の在り方

2. 主題設定の理由

技術・家庭科では、「生活に必要な基礎知識と技術の習得を通して、生活と技術の関わりについて理解を深め、進んで生活を工夫し創造する能力と実践的な態度を育てる」ことを目標としている。これは、基礎的・基本的な知識や技術を習得するとともに、「考える力」「創造する力」「実践する力」を育み、「生きる力」を身につけさせることをねらいとしている。

これからの社会を生きる生徒にとって、実践的・体験的な学習活動を行う本教科の果たす役割は、非常に大きいと考える。習得した知識や技術、考え方を系統的な学習を取り入れること及び、一人ひとりが生活をつくる中で自由にふくらませ、創造していくことが必要と考え、本主題を設定した。

3. 研究の概要

(1) 研修の主な内容

①「令和元年度千葉県教育研究会技術・家庭科教育部会研究大会」参加

○授業展開

[技術分野]生物育成の技術

(B(2)栽培又は飼育の過程や結果の評価, 改善及び修正)

[家庭分野]幼児はどのように見えているのだろう

(A(3) 幼児の生活と家族)

○施設見学

千葉県立現代産業科学館

常設展示では、「現代産業の歴史」と題して、千葉県の産業の歴史と未来、電気・石油・鉄との出会い、電力産業、石油産業、鉄鋼産業の5つを紹介していた。また、先端技術への招待のコーナーでは、エレクトロニクスや新素材、バイオテクノロジーなどの先端技術とこれらの先端技術を根底から支えている超高真空や超低温などの極限環境をつくり出す技術についてのパネルを見学した。

○作品展見学

今後の授業に活かせるよう、各支部の作品を見学した。

- ② 「令和2年度千葉県教育研究会技術・家庭科教育部会研究大会 八千代大会」
準備委員会発足
- 研究部ごとに今後の準備日程確認と分担内容の確認
 - 授業内容の決定及び指導案作成，発表内容および資料作成
 - 各学校でのICTの活用状況アンケート結果，集計
 - 授業者から必要な教材・教具の提案と確認及び作成分担
 - 授業及び研究協議の講師依頼
 - 体育館の掲示物の決定と分担

③ 八千代市作品展準備要綱検討，新指導要領の題材について

本年度は2月22日（土）・2月23日（日）の2日間にかけて八千代市中学校技術・家庭科作品展が，市民ギャラリーで開かれる。市内の生徒を招いて体験的な取り組みを行う講座を設置し，ものづくりの楽しさを味わってもらおうと企画している。昨年同様マイスターの方を招き，プロの視点で子どもたちにもものづくりの楽しさを伝えていただくため，年度始めから計画的に進めている。児童生徒にとって，価値ある体験にしたいと考えている。

4. 成果と課題

月々の研修内容を明確にし，部員一人ひとりが意欲的に取り組んだ。生徒の意欲関心，基礎的・基本的な知識や技能の向上を目指し，それを身に付けさせるため，ICTを活用した授業展開に役立つ裁縫技能や調理実習技能をビデオに録り，編集を行った。他支部の様々な作品を見学することにより，生徒の意欲や技術の向上を目指す作品展を開催した。

来年度の研究大会八千代大会の開催にあたり，円滑に進むようそれぞれ各部会で検討を行い，準備を進めた。

今後の課題としては，少ない部員の中で千葉県研究大会八千代大会をいかに成功させるかが一番の課題である。全部員が知恵を出し合い，残り少ない時間を有効に使い最高の大会にしたいと考える。

(5) 船橋支部

(学校数 27 会員数 技術科 20名 家庭科 19名)

1. 船橋支部研究主題

技術 : 生活や技術を工夫し創造する実践的な態度の育成
～主体的・対話的で深い学びを通して～

家庭 : 基礎基本の定着をはかり、実生活に活かすための指導法の研究
～新学習指導要領実施へ向けて～

2. 主題設定の理由

(1) 技術

日本社会は、グローバルかつ急激な経済発展と技術革新で大きく変貌してきた。特に最先端技術について、持続可能な未来を見据えた地球規模で自然環境との共存を目指したもののや社会や経済に対して貢献できるものが多くあり、世界から注目されている。

しかし、いまだに消費社会が振興していて、自らものづくりをする場が減少している。また、学校での技術・家庭科についても、配当授業時数が少なく、技能の習得と深化を図ることが難しくなっている現状である。

このような社会であるからこそ、ものづくりを通して実践的・体験的経験から得るものが多い技術・家庭科の存在意義は重要である。社会の急激な変化に自ら積極的に対応し、生活に生きる力を育むためには、生涯にわたって学習の基礎となるような、知識及び技能を習得させ、さらにその能力を高め習熟させることが大切であり、そのための手だてを研究する意義は大きい。

そこで、3年間の授業を通じて基礎的な知識と技能を繰り返し学習することと、授業の工夫を行うことで、ものづくりに関する能力を定着させるとともに、しっかり作られたものを長く使用することで自然環境の保全を実践し、社会・経済へ貢献する態度の育成を図っていく。

また、実習等の結果を整理し考察することや、設計図や回路図といった図表及びものづくりに関する概念などを用いて考えたり、説明したりすることなど、言語を通じた学習活動を充実することにより「思考力・判断力・表現力等」の育成を図っていく。

(2) 家庭

今日、ほとんどのものが既製品化され、生徒の生活も家事労働の社会化や機械化にとともに、家庭における体験が乏しくなっている。また、家族・家庭生活の多様化や消費生活の変化等に加えて、今後の社会の急激な変化に主体的に対応することが求められる時代となった。家庭科の学習は生徒の関心や有用感が高い一方、家庭生活の一員として協力することへの関心が低く、家族や地域の人々と関わること、家庭での実践や社会に参画することが十分ではないことなどに課題が見られる。その中で、自分らしく、かつ便利に、合理的に生活していくためにも、技術・家庭科の授業が重要になっている。

令和3年度に新学習指導要領が全面実施となるにあたり、家族・家庭、衣食住、消費や環境等についての科学的な理解を図り、実践的・体験的な学習活動を通して、それらに係る技能を身につけさせることを目指す。加えて、生徒が様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していく力、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて生活の中から見いだした課題を解決する力、よりよい生活の実現に向けて生活を工夫し創造しようとする態度を育成することを目指し、本研究主題を設定した。

3. 研究の概要

研究内容 (各月 上段：技術 下段：家庭) ※7/24 は技術のみ

月	日	研究種別	研究内容	会場
4	24	総会	役員選出・研究主題・年間計画の検討	船橋中学校
5	15	全体研修 全体研修	環境整備及び大型機械・手工具の実技研修 被服実習の展開・評価・作品等について(製作)	船橋中学校 七林中学校
6	19	全体研修 研究法研究	実技研修「状差し」の製作方法の検討 設楽史子教諭「和服について(1年)」	大穴中学校 宮本中学校
7	3	授業研究 授業研究	大野和樹教諭「材料と加工に関する技術(1年)」 和田朋子教諭「幼児の遊びと発達(3年)」	高根中学校 飯山満中学校
7	24	一日研修	実技研修「糸のこ盤を扱う技能の向上を目指した研修会」	東京都港区
9	25	全体研修	船橋市教育研究大会	市総合教育センター
10	23	実技研修 全体研修	実技研修 教材研究「印箱の製作」 新学習指導要領改訂に向けての評価等について	坪井中学校 七林中学校
11	20	授業研究 一日研修	加田淳一教諭「エネルギー変換に関する技術(2年)」 肉の情報館の見学、東京臨海広域防災公園で防災体験	旭中学校 東京都内
1	15	全体研修 授業研究	実技研修「丸棒作り機の製作」 小学校教諭「寒い季節を快適に(住生活)」	飯山満中学校 飯山満南小学校
2	5	全体研修 全体研修	研究のまとめ・次年度の方向性 研究のまとめ・次年度の方向性	飯山満中学校 市総合教育センター

4. 成果と課題

(1) 技術

①成果

- ・毎月の例会や、市教研大会において、若手チームとベテランチームが分担して、研修の企画・運営を行った。一年間を通して、若年層の教員の授業における指導力や、技術的な面の成長をみてとることができた。

②課題

- ・学習指導要領の改訂に向けて準備が急務である。

(2) 家庭

①成果

- ・6月の授業研究では普段の授業展開を参観することで、指導法の工夫を知り、授業の流れや展開の仕方についての領域を広げることができた。
- ・新学習指導要領改訂に向けて大学講師を招き、改訂内容や評価方法、年間計画について要点を説明してもらったことにより、今後の見通しを持つことができた。

②課題

- ・授業数も限られていることから、ICT機器を活用し、効果的な授業方法の工夫をしていく必要がある。しかし、学校によって機材の設置状況や教員によって活用スキルが異なるため、市内で共有できる教材開発等を進められることが望ましい。

(6) 市川支部

1. 研究主題

生活や技術を工夫し創造する思考力・判断力・表現力を育成する学習指導の在り方
～主体的・対話的で深い学びを通して～

2. 主題設定の理由

市川市では以下の視点を重視した授業改善について、3つの目標が掲げられている。

- ①生徒自身が見通しをもって自らの学習を振り返り次につなげる「主体的な学び」の実現
- ②他者との関わりの中で、自らの考えを広げ深める「対話的な学び」の実現
- ③学習の過程の中で、問題発見・解決を念頭に置いた「深い学び」の実現

これらをふまえ、生徒が主体的に問題解決を図り、仲間の力を借りながら、あるいは互いに協働しながら、思考力・判断力・表現力を高め、深い学びを経験していくことが、今後、技術革新の進んだ社会で生き抜く力を身につけていくための大切な一歩と考える。

3. 研究の概要

(1) 技術科分野

月	日	研究種別	研究内容
4	17	総会	部会組織決定、研究主題の決定、情報交換
6	12	定例研	研究大会に向けての打ち合わせ
6	28	千葉県教育研究会技術・家庭科教育部会研究大会	
9	11	定例研	研究大会の反省
10	9	定例研	ナガタ産業によるプログラム研修
11	6	ブロック定例研	各中学校ブロックの研究会
1	8	定例研	新システム PC の研修
2	5	定例研	研究のまとめ、次年度の方向性の検討

6月（千葉県教育研究会技術・家庭科教育部会研究大会）

研究大会では、“生活や技術を工夫し創造する思考力・判断力・表現力を育成する学習指導の在り方”～主体的・対話的で深い学びを通して～という研究主題のもと、これまで定例研技術科部会で行ってきた研究の成果も参考にしながら、技術科のそれぞれの領域ごとに授業実践例を挙げ、その効果や生徒の学ぼうとする意欲がどのように向上できるかを調査し、利点がある授業方法を再検討することができた。

展開授業では「小松菜の栽培」を題材とし、「小松菜の収穫」及び「栽培結果のまとめ」を実践した。内容は小松菜を収穫し、収穫量を測定した。

また葉の色や形などの状況をワークシートへ記入して生育状況と小松菜の収穫状況との関わりについて比較した。最後にグループごと収穫量を比較し、どのような生育状況が適切なのか検討した。



(2) 家庭科分野

月	日	研究種別	研究内容
4	17	総会	部会組織決定、研究主題の決定、 県大会に向けての検討
6	12	定例研	研究大会についての打ち合わせ
7, 8		定例研	研究部別に研修
9	10	定例研	県大会の反省
10	10	定例研	花王ミュージアム見学
11	6	ブロック定例研	各中学校ブロックの研修会
1	8	定例研	授業資料（見本等）の作成
2	5	定例研	研究のまとめ、次年度の方向性の検討

今年は6月28日に県の研究大会があったため、それまでは大会に向けて研究のまとめや、実際の授業計画や準備など一色になった。会場校に他校の教員が行って授業をするため、事前に何回か見学や授業をしに行く事なども必要だった。

6月（県大会について、直前の活動や当日の流れについて）

技術科と合同で、前日と当日の流れについて確認した。総会の会場になる現代産業科学館のサイエンスホールの確認をしたり、家庭科の授業会場となる教室を確認したり整備をするなど当日に向けての会場作りに取り掛かった。この日の確認で、さらに必要な作業を別日に行った。

前日には、計画どおりに総会の会場、作品展の会場、家庭科の会場を設営し、総会のリハーサルを実施した。当日は、チャイルドビジョンを使って幼児の視野を体験し、そこから分かったことをまとめて幼児との関わり方を工夫する授業を発表できた。また、授業でふれあい交流を行う事が少子化の現在の中学生に効果的であることなど、いままでの研究のまとめを発表できた。



4. 成果と課題

(1) 技術科分野

千葉県教育研究会技術・家庭科教育部会研究大会を通して、今後の指導法改善・工夫につなげていきたい。また、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」についてはこれからも研究を重ね、実現していきたい。研究大会だけでなく、定例研での情報交換や授業研究・授業実践例などでは支部の先生どうし共通理解ができた。また、業者の方にも研修をしていただき、新たな教材や指導法について学ぶことは今後も継続的に行っていきたい。

(2) 家庭科分野

県大会では良い発表ができたが、実際の授業者や発表者への負担が大きかった。さらに他校の先生方と協力して研究を進める事を普段の定例研で取り組んでいく必要性を感じた。1校1名の心細さを、定例研を通して解消できるように活動して行きたい。

5. まとめ

千葉県教育研究会技術・家庭科教育部会研究大会から学んだことを生かし、今の子どもたちに必要な指導法を考え、実践していきたい。また今後も定例研などで情報交換や研究を重ねていきたい。

(7) 浦安支部

(学校数 19 会員数14 技術科 8名 家庭科 6名)

1. 浦安支部研究主題

生活の中で課題を見出し、自ら進んで工夫し、創造する生徒の育成
～浦安市の環境を踏まえた生物育成の技術を通して～

2. 主題設定の理由

千葉県技術・家庭科教育部会の主題である「生活や技術を工夫し創造する実践的な態度の育成～主体的・対話的で深い学びを通して～」を受けて、浦安市技術・家庭科教育部会では、「生活の中で課題を見出し、自ら進んで工夫し、創造する生徒の育成～浦安市の環境を踏まえた生物育成の技術を通して～」とした。

本市の研究は、特に学習指導要領にある以下の3つ目標において研究を進めてきた。

- (1) 生活と技術についての基礎的な理解を図るとともに、それらに関する技能を身につけるようにする。
- (2) 生活や社会の中から問題を見いだして課題を設定し、解決策を構想し、実践を評価・改善し、表現するなど、課題を解決する力を養う。
- (3) よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて、生活を工夫し創造しようとする実践的な態度を養う。

これらの内容において、今年度は、(2)に関する研究を中心に、技術科では「生物育成」の分野において、家庭科では、「衣食住の生活」において研究・実践を行った。

3. 研究の概要

(1) 研究計画

6月19日(水) 定例研 研究テーマと年間計画、分担等の立案および確認

6月28日(金) 市川支部「令和元年度 千葉県教育研究会技術・家庭科教育部会研究大会並びに定期総会・作品展」への準備および参加

10月16日(水) 定例研 各学校の実践確認

10月25日(金) 関東ブロック大会 茨城大会 3名参加

11月13日(水) 定例研 関東ブロック大会の内容の共有化および次年度研究の課題検討

11月20日(金) 浦安市子ども作品展搬入および審査

1月15日(水) 第31回五市中学校合同技術・家庭科作品展見学

2月 5日(水) 定例研 まとめと課題

(2) 研究内容

① 技術分野

学習指導要領の「B 生物育成に関する技術」において、研究・実践を行った。浦安市は、集合住宅が多く、「生物育成」においては、学校で学んだ内容を家庭で実践できにくい課題があった。そこで、まずは、生徒がその浦安市の環境や各家庭の環境を個々に調べ出し合い、その環境に合った生物や品種を育成する手法を検討してきた。

② 家庭分野

家庭分野では、「B 衣食住の生活」に関する授業内容の検討や教材についての情報交換を行い、実際の時数の配分や教材費等の検討を行った。その領域は、さらに3つの領域に分かれるので、より詳しい授業実践の情報共有が大切である。

4. 成果と課題

(1) 技術分野

昨年度は、ポット栽培でリーフレタスとトマトを栽培する実践が、ある一定の収穫量や生徒の達成感を見込めると判断できた。今年度は、その2種類の各校の実践をまとめ、比較検討し、授業展開する上での、教材等の検討を行った。授業の導入から流れ、注意点、副教材、ワークシート等、より具体的で実践的な内容を共通理解することができた。

課題として、展開等はある程度共通で実践できるが、授業の時期や季節が各学校で違うので、その点が今後の検討となる。

(2) 家庭分野

昨年度は、授業内での話し合い活動の展開方法やその割合を検討し、さらに副教材等の費用を含めた検討を行ってきた。それを踏まえて、本年度は、各校のICT機器の活用方法や実践例を検討することができた。また、調理実習等の食材の購入費用や方法等検討することができた。

課題として、ICT機器の活用方法のお検討は、まだまだ行っていくべきである。

(8) 東葛飾支部

(学校数72)

1. 研究テーマ

確かな知識と技術を身につけ、社会の変化に対応し、
生活に生かす力を育む学習指導のあり方

2. 研究テーマ等について

今年度は、東葛飾管内の家庭科、技術・家庭科研究大会を松戸市が担当した。研究テーマについては、新学習指導要領への移行を見据え、確かな知識と技術を身につけ、社会の変化に対応し、生活に生かす力を育む学習指導のあり方を研究テーマの中心に置き、松戸市内の先生方が協力して研究に取り組んだ。

3. 研究概要

授業研究では、技術分野において「ブロック崩しゲームの制作」という題材で計測・制御のプログラミングの授業に取り組んだ。新学習指導要領においてプログラミング教育は目玉の一つとされており、経済産業省の調査では2030年に約59万人のIT人材が不足するであろうと予想されており、国の施策としてもIT人材を育成することは重要な課題であると推測される。小中学校でプログラミングを学ばせることは、単にプログラムを学習するのではなく、プログラミング的思考を育てることにあると考える。今回の題材で計測・制御に取り組むことでプログラミングに必要な分析する力が育まれるものと考えている。また、家庭分野においては、「知識構成型ジグソー法」を融合させた実践的・体験的な学習活動を取り入れた授業展開で、「地域の食文化について理解し、地域の食材を用いた和食の調理を行う」とい



う内容で共にグループごとの言語活動やICT機器の活用を重視した授業に取り組んでい

た。特に今回、2020年にオリンピック・パラリンピックが東京で開催されるにあたり、松戸市がドミニカ共和国をホストタウンとして迎え入れることが決定しており生徒たちの関心の高さが強く感じられる授業であった。

授業後の講評講演では、千葉大学教育学部特命教授兼附属中学校副校長の三宅健次先生に「技術・家庭科において、新学習指導要領が求めるこれからの指導内容及び指導法」という演題で新学習指導要領が求める視点や過去との関連性について詳しくお話をいただいた。この大会に参加した管内の多くの先生方にとってたいへん有意義な講演であったと思う。



4. 成果・課題と今後の展望

令和3年の新学習指導要領の完全実施に向けて東葛飾地区の技術・家庭科部会でも数年前から様々な取り組みを行ってきた。一昨年前の鎌ヶ谷市の研究大会、昨年の柏市で行われた千教研の研究大会、そして今年度の松戸市の研究大会と東葛飾管内の多くの先生方が、研究大会に参加し研修を深めてきた。

今回の研究大会では、当日の授業づくりのために松戸市内の先生方が、何度も集まり授業の準備が行われたと聞いている。また、同じ課題で市内数校でプレ授業を行い当日の授業に臨んだとも聞いている。日頃の地道な取り組みが、今回の研究発表の礎を築いたのだと感じる。更に裏方として会場校の先生方、そして小学校の家庭科の先生方が会場準備等で支えていたことも付け加えておきたい。今大会は、松戸市内の先生方の力が見事に結集した大会だったと言えるのではないだろうか。

近年、各種研究大会を運営することは、様々な面でとても大変である。東葛飾支会では、現在2年に一度の間隔で管内6市持ち回りで研究大会を開催している。その歴史は古く50年以上前から行われていると聞いている。この歴史ある東葛飾管内の技術・家庭科の研究大会のあり方、運営方法にも改善の必要性を感じている。今後の課題として研究大会の運営方法の改善に着手していきたいと考えている。

(9) 印旛支部

(学校数 小学校 108 中学校 49 会員数 小家庭 40 技術科 37 家庭科 39)

1. 印旛支部研究主題

確かな知識と技能を身に付け、社会の変化に対応し、
生活や技術を工夫し、創造する力を育む学習指導のあり方

2. 主題設定の理由

現代の子どもたちを取りまく生活環境は科学技術の進歩とともに大変便利なものになってきている。しかしながら、子どもたちがものをつくり、活用する生活体験は少なくなってきており、生活に係る知識及び技能などが徐々にではあるが劣ってきている。

新学習指導要領において、小学校では、生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成することを重視している。また中学校では、生活の営みに係る見方・考え方や技術の見方・考え方を働かせ、生活や技術に関する実践的・体験的な活動を通して、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて、生活を工夫し創造する資質・能力を育成することを重視している。

それらを踏まえ、授業を通して子どもたちに身近な家庭・社会生活に目を向けさせ、興味・関心を高めることにより、自ら学ぶ意欲が喚起され、生活の基本的な仕組み（技術）が発見できると考える。そして、「生活の営みに係る見方・考え方」や「技術の見方・考え方」を働かせ、問題解決的な学習を充実させることにより、生活や技術に係る基礎的・基本的な知識と技能や技術の習得が図られ、そうすることで自分の適性にあった創意工夫が生まれるものと考えられる。そのことにより児童・生徒一人一人における家庭生活や社会生活が充実し、さらには生活の自立を図ることができると考え、本主題を設定した。

3. 研究の概要

(1) 行事

①定期総会 5月8日(水)

成田市立成田中学校で開催。昨年度の報告および今年度の研究主題、行事予定内容等を確認。

②県研究大会・総会・作品展 6月28日(金)

印旛地区内14作品を出展。家庭分野1作品が全日中兵庫大会に選出。

③中学校技術・家庭科実技研修会 7月29日(月)・30日(火)

佐倉市立佐倉中学校で実施。県伝達講習を行い、技術分野と家庭分野に分かれ印旛地区内の独自の研究をそれぞれ深化。

④小学校家庭科実技研修会 8月9日(金)

成田市立本城小学校で実施。県伝達講習を行った。

⑤関東甲信越地区(茨城大会)中学校技術・家庭科研究大会 10月25日(金)

印旛地区より17名参加。(資料参加を含む。)

⑥第16回千葉県中学生創造ものづくり教育フェア 11月9日(土)

印旛地区から1校(2名)が木工、1校(6チーム)がロボコン、3校(13チーム)がお弁当に参加。

⑦第59回印旛地区小学校家庭科、中学校技術・家庭科作品展

11月29日（金）～12月2日（月）

酒々井町立中央公民館で実施。小学校家庭科作品235，中学校技術科作品152，中学校家庭科152，出品総数535。来賓，地域住民，児童・生徒と保護者など646名が来場。



[第59回 印旛地区小学校，中学校技術・家庭科作品展の様子]

(2) 研究について

①技術分野

例年活発な研究協議が行われる印旛地区教育研究集会。今年度は第二部会（成田市・富里市・栄町 計14校）による「【D：情報の技術】生徒がプログラミングの基礎・基本を身につけるための指導法について～小中連携によるプログラミング学習の展開を通して～」の提案と，第三部会（印西市・白井市 計14校）による「【C：エネルギー変換の技術】タブレットを用いた技能習得及び評価への活用」の2本が提案された。【情報の技術】の提案では，これまでの実践例が少ないと思われる，小学校と中学校が連携した授業実践が紹介され，支部全体のプログラミング教育への授業改善にもつながる内容となった。【エネルギー変換の技術】の提案では，これまで以上にICTを活用した授業実践例が示された。作業動画視聴による生徒の困り感の軽減や，生徒の作業動画を評価に活用することで，これまで以上に生徒全体をきめ細かく指導・評価できるような実践であった。

②家庭分野

小学校による「社会の変化に対応して，生活をよりよくしようとする実践力の育成を目指して～消費者教育を通して～」の提案と，中学校による「高齢者との関わりを通して，地域の一員として進んで協働できる生徒の育成」の2本が提案された。小学校の提案では「課題解決学習」，「実感を伴う体験の場」，「金融教育との関連」の3つを研究の視点として，買い物，契約，お金について学んだ後，カレーライスを作るための食材を選ぶ観点を考えながら，実際に購入し，調理する学習について発表された。中学校の提案では，地域ボランティアとして活動している高齢者とふれ合い，コミュニケーションを図ることができる授業展開が紹介された。授業を通し，高齢者の身体的特徴に気づき，豊富な知識や技術を地域のために活用する姿から，生徒自身が地域の一員として協働できることについての意識を高めるための工夫について発表された。

4. 成果と課題

印旛地区では近年，免許外の教員が授業を担当する学校の増加傾向が続いている。そのため地区の研修会では内容を精選し，授業で扱う用具や工具，電気機器や工作機械等の正しく安全な活用法などを多く盛り込み，授業者のスキルアップを重視してきた。また授業実践力の向上を通して，生徒が主体的・対話的で深い学びの中で作品製作を行い，問題を解決していく姿勢を身に付けさせられるように研修を積んできた。その成果は作品展に表れ，免許外の教員が担当する学校の作品の質が年々向上してきている。

課題は昨年度に引き続き新学習指導要領全面実施に対応した指導計画，評価計画，題材の選定等の諸整備である。そのため，今後はこれまで以上に研修会の場を有効に活用していきたい。

(10) 香取支部

(学校数 中学校 10校 技術科 12名 家庭科 3名 小学校 28校)

1. 香取支部研究主題

自ら課題をもち、実践活動を通して解決する力を育む学習過程の研究

- (1) 中学校 学習指導要領の研究、教材研究、研究実践の積み上げ
- (2) 小学校 学習指導要領の研究、研究実践の積み上げ

2. 主題設定の理由

技術・家庭科の目標は「生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技術の習得を通して、生活と技術のかかわりについて理解を深め、進んで生活を工夫し創造する能力と実践的な態度を育てる。」である。

香取支部の生徒や地域の実態として、次の点が挙げられる。

- ① 農村地域でありながら、生活体験の不足、ものづくり体験が不足している。
- ② 祖父母の農業従事者は多い。父母世代は、地元及び近隣の鹿嶋・成田方面へ勤務している者が多い。

また、香取支部は平成22年度県研究大会を開催し、そのときの研究主題「確かな知識と技術を身に付け、自ら課題を解決していく力を育む学習指導のあり方」を継続する形で、本主題「自ら課題をもち、実践活動を通して解決する力を育む学習過程の研究」を設定した。

3. 研究の概要

(1) 研究の仮説

学習活動の中に意図的に問題解決的な学習を取り入れ、繰り返し行っていくことで、児童生徒の「問題発見能力」「問題解決能力」が高まるであろう。

(2) 研究方法

- ① 各学校で日常の授業の充実に努める。
- ② 公開授業に積極的に参加し、その内容を支部内に伝達する。
- ③ 校内研究会などの機会に、授業を公開するとともに研究協議を充実させる。
- ④ 研究レポート等の提案発表を行い、課題解決のための協議を行う。
- ⑤ 実技研修会において、自らの技能向上を図る。
- ⑥ 作品展の際、作品を通して授業実践の情報交換を行う。

(3) 研究実践

- ① 各学校での授業実践は、会員が課題を認識して取り組むことができた。
- ② 校内研究での相互の授業公開を実施し、参観すると共に研究協議にも参加した。しかし、それぞれが授業を持っており、他校の授業を見て研究協議に参加するだけの時間的な余裕がなく、活発にはできなかった。
- ③ 実技研修会を夏季休業中に実施した。

ア 小学校

「食に関する指導」のほうれん草やじゃがいもをゆでる調理、「衣に関する指導」のペットボトルカバーを製作した。少人数グループだったので、全員が調理の基礎を学ぶことができた。また、ペットボトルカバーは、「生活を快適に」「楽しい雰囲気」を作り出す作品に仕上げることができた。

イ 中学校技術分野

「材料と加工に関する技術」についての教材の製作とその指導法という内容で実技研修会を実施した。工作機械を効果的に扱い製作するための指導法を、1×4材を用いた「おもちゃカートづくり」を通じて学んだ。常に生徒の安全を考え、指導にあたらなければならないので、工作機械の整備や使用法等について、香取地区のすべての教科担当者が再認識するよい機会となった。

ウ 中学校家庭分野

太巻き寿司づくりと高齢者介護について研修した。実習時間50分以内に太巻き寿司を完成させ試食、片付けまで完了させる工夫や準備について、参加者で話し合いながら進めた。高齢者介護の実際についても、車いすでのサポート方法などを実践し、とても有意義な研修となった。

- ⑤ 教育研究協議会では、技術分野より「正確に組み立てるため研究」「主体的に生物育成を実践する生徒の育成」「生活実践へつなぐ学習指導の工夫」の3本、家庭分野より「生活実践力を高める指導法の研究」を研究テーマとした提案があった。小学校の先生を含む両分野合わせて約20名の参加があり、活発な討議が行われた。また、各学校の現状を知ることができ、情報交換の場となり、有意義であった。
- ⑥ 作品展では、優秀作品を選考するとともに、工夫した作品・新しい題材等を検討する機会となった。また、基礎的・基本的な技能の習得の大切さを改めて確認することができた。

4. 成果と課題

(1) 成果

- ① 香取支部の様々な研修会及び研究部員一人一人の授業実践を通して、研究主題に迫る課題・ヒント等を見出すことができた。
- ② 研究部員は少ないが、お互いに気心を知った仲間であり、研修の成果を共有することが簡単にできた。
- ③ 研修会の折に、日ごろの疑問点や聞きたいことを気軽に聞くことができた。

(2) 課題

- ① 実技研修会や実践記録を用いての研修機会はあるが、授業研究の機会が少ないので、研究主題についての評価が、明確にできていない。
- ② 中学校技術・家庭科担当者が少なく、複数の学校をかけ持ちして授業を行っている講師もいる。講師は出張できないため、実技研修会に参加できず、その機会に行われる情報交換もできずにいる。
- ③ 香取支部では、児童生徒の減少に伴い、小・中学校の統合が進められている。数年後には中学校8校、小学校20校ほどになる。このため、香取支部として、研究・研修内容、作品展等の行事での運営面の改善を迫られている。
- ④ 県ものづくり教育フェアへ積極的に参加するようにする。

※ 香取支部としての本年度の行事

- 4月12日 研究部総会 行事、決算・予算、役員改選
- 5月29日 役員研修会 令和元年度の行事運営の詳細確認
- 8月5日・6日 実技研修会 小学校、中学校技術・家庭分野に分かれての研修
- 8月22日 研究協議会 技術分野の提案及び協議
- 1月29日 役員研修会 (作品展搬入・作品審査)
- 1月30日～2月5日 小学校家庭科、中学校技術・家庭科作品展
- 2月5日 役員研修会 (作品展反省・来年度の見通し)

(11) 東総支部

(学校数 15校 会員数 技術科 11名 家庭科 13名)

1. 東総支部研究主題

【技術分野】

地域の実態を踏まえた指導法のあり方
～東総地区技術・家庭科指導マニュアルの作成を目指して～

【家庭分野】

環境に配慮した生活を主体的に営もうとする児童・生徒の育成
～エコクッキングの視点を取り入れた学習活動を通して～

2. 主題設定の理由

【技術分野】

東総地区では、多くの免許外の教員が授業を担当している。また、学校に1人だけであることが多く、授業の内容や指導方法について相談できないことが多い。

これらの状況から、誰でも参考にして授業を進めることができるデータベースが必要である、また、人事異動による新任地での負担も軽減できると考えられる。

【家庭分野】

小中家庭科における5年間の学習を通して、新たに環境に配慮した生活ができる児童・生徒を育てていく指導法の確立が必要である。特に、調理実習の流れが小中学校で統一されていると、技能の習得や理解を深める上で有効ではないかと考えられる。

3. 研究の概要

(1) 研究の仮説

【技術分野】

東総地区で共通の指導計画や指導方法を示した指導マニュアル「東総スタイル（仮称）」を作成することで、技術科教員の負担が減り、授業内容がより充実したものになるであろう。

【家庭分野】

自らの食行動や消費行動を振り返り、身近な生活が環境に与える影響について関心を高められれば、環境に配慮した生活を送る上で必要な知識や技能を身に付けることができるであろう。また、小中連携を図り、身に付けるべき基本的な知識・技能を整理し、エコクッキングの視点を取り入れた実践的・体験的な学習を積み重ねていけば、環境に配慮した行動ができるようになるであろう。

(2) 研究内容

【技術分野】

①免許外指導者へのアンケート内容の検討

本地域において、免許外で技術科を指導する教員の悩みや困っていることを把握するためのアンケートの調査項目を検討した。

②「材料と加工に関する技術」のワークシートの検討

前年度に具体的な製作品が固まったことから、本年度はその製作の指導に関するワークシートの検討を行った。

【家庭分野】

①小中連携のための資料内容の検討と作成

小中学校それぞれの食物学習の中で、環境に関わる項目を選定し、アンケート調査を行った。また、調査結果についてはチェック表の作成に反映させた。

②提示資料・映像資料の作成

チェック表の内容で指導に際して特に注意が必要な点や、言葉による説明だけではイメージしにくい部分については掲示できる資料を作成した。また、これらの資料をデータ化したCDを管内全ての小中学校に配布した。

③活用方法と活用後のアンケートの作成

エコクッキングのチェック表や提示資料セットを活用のポイントと合わせて、管内全ての小中学校に配布し、要点を押さえたスムーズな指導を実践できるようにした。

4. 成果と課題

(1) 成果

【技術分野】

東総スタイルで扱う製作品についての協議や試作を通して、指導者と生徒の両者の視点で考えることは非常に難しいと感じたが、最低限指導していかなければいけないこと、技術科という教科が育む力とは何なのかを再確認できる良い機会となった。今回の製作品についての研究を通して、「東総スタイル」を作成する大きな足がかりとすることができた。

【家庭分野】

家庭科の各題材に環境への配慮を取り入れた学習は少しずつ定着している。今回もアンケート調査を複数回行ったことで、担当者の指導法に関する指導者の困り感や児童・生徒の環境に対する意識を知ることができた。また、小中学校担当者が協力して研究を進めたことで、連携をより深めることができた。

(2) 課題

【技術分野】

今後は作成したアンケートを用いて東総支部の技術科指導教員に調査を依頼し、現場の実態を集約したい。また、そのアンケート結果と今年度の研究を「東総スタイル」作成に活かし、地域に長く根付かせていくための資材確保の方法についても検討していく必要がある。

【家庭分野】

今回配付した資料を今後も継続して活用してもらうためには、更に追加の情報や実際に活用した意見をもとに改善していかなければならない。また、今後は他の題材でも環境を扱った内容でデータベース化を進め、学習の系統性を重視して基礎的・基本的な知識と技能の習得と定着を目指していきたい。

(12) 山武支部

(学校数 5 9 会員数 技術科 1 5 名 家庭科 1 2 名)

1. 山武支部教育研究主題

人との関わりをとおした学びから、豊かな生活を創造する態度を
育成する技術・家庭科教育の在り方

2. 主題設定の理由

令和2年度(中学校は3年度)から改訂される次期学習指導要領を見据え、家庭科、技術・家庭科においては、実践的・体験的な活動を通して、生活や社会で利用されている技術についての基礎的な理解を図り、それらに係る技能を身に付けるとともに、生活や社会の中から技術に関わる問題を見出して課題を設定し、それを解決する力や、よりよい生活や持続可能な社会の構築に向けて、適切かつ誠実に技術を工夫し創造しようとする態度の育成を目指す必要がある。

「技術分野」では持続可能な社会の構築やものづくりを支える能力の育成、また技術を適切に評価し活用できる能力の重視など、社会の変化に対応する視点からの改善が必要である。一方、「家庭分野」では、少子高齢化や家庭の機能が十分に果たされていないことへの対応や食育の推進など、社会の変化に対応した学習を行わなければならない。

しかし、現状を見てみると、「授業で学習したことを生活や社会の中で、確実に活かしているか定かではない」ようである。授業で学んだことを活かすため、思考力・判断力・表現力を育むような授業のあり方について研究を進めていく必要がある。言語活動を重視し、生徒同士の主体的な学び、対話的な学びが実施されるよう工夫する必要がある。また、確かな「教え」とおして、基礎的・基本的な知識と適切な技能の定着を図るとともに、課題を見だし解決を図る問題解決的な学習のあり方について研究を進めていくことが重要であると考え、本研究テーマを設定した。

3. 研究の概要

(1) 研究内容

- ・学習指導要領に即した指導内容と言語能力の育成を取り入れた授業研究を進める。
- ・学習指導要領の趣旨・内容を踏まえ、題材の開発や授業の工夫改善、評価方法と評価の判断基準の見直しをする。

(2) 運営方針

- ・研究活動及びその他の部会事業をとおして、会員の力量の向上を図る。
- ・年間の諸活動における会員の要望を集約し、次年度の運営方針案に反映させる。

(3) 年間計画

- ・ 5月 9日(木) 山武教育研究総会(横芝中学校)
- ・ 6月 6日(木) 第1回同一研修会(各会場)
- ・ 7月 31日(水) 実技伝達講習会(東金中学校)
- ・ 8月 23日(金) 教育研究集会(各会場)
- ・ 11月 14日(木) 第2回同一研修会(各会場)
- ・ 1月 11日(金) 小中学校技術・家庭科主任会(横芝中学校)
- ・ 2月 1~3日(金~日) 山武郡市小中学校技術・家庭科作品展(東金サンピア)

(4) 実践の概要

①小学校部会

ア **第1回同一研修会** 東金市立東金中学校を会場に、キャンドルアーティストの樋田理奈氏を講師としてお迎えし、「ドライフラワーやアロマの香りについて」の講話をいただいた。また、家庭生活に潤いを与える小物づくりということで、「ボタニカルキャンドル」「アロマワックスサシェ」の製作をした。講師の方自作のドライフラワーを使っでの作品製作で、身近な草花を使って作ってみたいくなるような研修であった。

イ **実技研修会** 食に関する研修として、「青菜のおひたし」「粉ふきいも」「味噌汁」の調理を行った。青菜をゆでる時は根元から沸騰したお湯に入れることや、菜箸の使い方、じゃがいもをむく時の包丁の使い方や、出汁を取る時の煮干しの処理の仕方など、基本的なことを児童に師範する方法をまなぶことができた。

衣に関する研修として、二重構造のペットボトルカバーで、外側はフェルトを使って手縫いで自由に装飾を施せるものを、内側はツイル生地を使ってミシンで洗濯しやすい物を作った。

ウ **教研集会** 林 紀美代教諭（成東中）による、身近な生活に生かせる知識及び技能を育む学習指導の工夫 ～制服の手入れと補修の学習を通して～

まつり縫いをするときに、1cmや5mmなどの量感をつかむことができないため、ギンガムチェックを活用する実践や、「制服の一生すごろく」を活用して制服について知る実践等が提案された。

エ **第2回同一研修会** 家庭科部会と学校給食部会との共同開催で、6年生家庭科「くふうしようおいしい食事」の授業展開を行った。

学級担任と栄養士がTTの授業形態で行い、児童はグループごとに立てた献立を見直した。栄養士の専門的な話や詳しい資料の提示を受け、児童は学習意欲を更に向上させていた。献立を段階的に改善させていく過程の中で、より良い献立の作成につながっていったと感じた。

②中学校技術・家庭科部会（技術分野）

ア **第1回同一研修会** 顧篤範教諭（光中）による、エネルギー変換の研集会を行った。身近なものを活用し、効率よく発電する教具の開発について話し合った。様々な意見を出し合い扉の開閉を利用した方法を考案した。エネルギーが変換する様子について、更にわかりやすく確認できる方法など、研究していく課題ができた。

イ **実技伝達講習会** 宇佐美晶良教諭（横芝中）・峰太郎教諭（東金中）を講師に、身近な材料で生活を豊かにするものづくりを学んだ。身の回りの物（おもちゃなど）を収納するボックスを作成した。また、そのボックスにキャスターを取り付けることにより、安易に移動も可能な作品を制作した。

ウ **教研集会** 根本教諭（東金東中）のレポートを元に、コンパニオンプランツの考え方をういた興味関心を高めることができる授業の方法が協議された。校内環境や生徒の状況に応じて、よりいっそう意欲的な栽培授業を行うにはどうすれば良いかなど、様々な視点から議論を深めた。

エ **第2回同一研修会** サンバファームの経営者（松下信也さん）による、有機栽培の実践方法や外国の野菜の管理方法について、説明をしていただいた。そういった経験が食育にもつながることを学んだ。生物育成の分野がある技術では、栽培学習など、実践的な学びを体感させることができる。

③中学校技術・家庭科部会（家庭分野）

ア **第1回同一研修会** ※小学校部会と合同実施のため、記載省略。

第2回同一研修会 ※小学校部会と合同実施のため、記載省略。

イ **実技研修会** 戸村慶子教諭（光中）・内山潤子教諭（東金中）を講師に、郷土料理を「短時間で作れる太巻きづくり」を学びました。また、学習指導要領にある高齢者との関わりについて話し合い、実際に高齢者体験をしながら、今後の指導方法等を学んだ。

4. 成果と課題

（1）研究の成果

授業者や研修を担当された講師の方々のご尽力により、参加者にとって、新たな知識や技能、実践してみたい工夫などが多く伝えられ、どの研修会も有意義なものであった。

（2）今後の課題

本教科の特性を生かし、思考力・判断力・表現力等の能力を高める授業や研修の工夫をさらに進めていかなければならない。また、本支部においては、経験の少ない教諭が増えていることから、指導するための知識や手法、技能の共有や評価方法などを協議する場を増やす必要がある。

(13) 長生支部

(学校数 中 9 校 小 10 校 会員数 32 名 中技術 11 名 中家庭 8 名 小家庭 13 名)

1. 長生支部研究主題

生活に役立つ知識と技術を身に付け、社会の変化に対応する力を育む学習指導のあり方

2. 主題設定の理由

本支部では、技術・家庭科の目標である「進んで生活を工夫し創造する能力と実践的な態度を育てる」に着目し、生徒に今まで学んだ知識と技術を応用した解決方法を探究したり、組み合わせて活用したりする力やそれらを基に自分なりの新しい方法を創造する力を育て、さらに社会の変化に対応しながら実際の生活の中で生かすことができる能力と態度を育てたいと考え、本主題を設定した。

3. 研究の概要

(1) 研究計画 (事業計画)

4月23日(火)	技術・家庭科研修会	活動計画の立案
4月26日(金)	長生教育研究集会	事業報告、活動計画
6月25日(火)	教材開発研修会	教育研究集会の提案内容の概要検討
7月26日(金)	小・家庭科伝達研修会	中央伝達研修会の伝達研修
8月1日(木)	教材開発研修会	教育研究集会の提案内容の詳細検討
8月2日(金)	中学校技・家実技研修会	実技研修会
9月18日(水)	長生教育研究集会	小学校家庭科からのレポート発表
11月29日(金)	技術・家庭科研修会	作品展の計画
1月31日(金) ～2月14日(金)	小学校家庭科、中学校技 術・家庭科作品展	作品展
2月25日(火)	技術・家庭科研修会	一年間の反省と次年度の計画

(2) 長生教育研究集会 (9月18日 長生村立長生中学校)

今年は小学校家庭科教育のレポート発表が行われ、研究主題に沿った内容で発表された。概要は次のとおりである。

提案者 睦沢町立睦沢小学校 大塚 久美子
一宮町立東浪見小学校 佐藤 雅子
茂原市立東郷小学校 鈴木 智子

① 研究テーマ

災害時の食生活の課題を解決する実践
～ 災害時の食事作りを通して ～

② 研究の目標

災害時に役立つ食事作りを通して、災害に備えたり生活の変化に対応したりできる態度を育む。

③ 研究仮説

- (ア) 災害時の食事を作る活動をすれば、生活に役立つ知識や技能を身に付けることができるであろう。
- (イ) 災害時の食事作りを家庭でも実践することで、保護者の意識も高めることができるであろう。

④ 成果と課題

〈成果〉

○研究仮説(ア)に対する実践の成果

- ・ 実際に災害時の食事を作る活動を行ったことにより、限られた道具や食材で温かいご飯の作り方を身に付けることができた。またご飯の作り方を参考にして、いろいろなおかずも作ることができた。この実践がきっかけとなり、日常生活でもいかにせる力がついた。
- ・ 災害時の食事作りを通して、児童も保護者も防災意識を高めることができた。
- ・ 食事や入浴などの日常生活が当たり前でできることの喜びや食事の大切さについて改めて気づくことができた。

○研究仮説(イ)に対する実践の成果

- ・ 災害時の食事を作る活動を家庭でも実践することで、保護者にも限られた道具や食材で温かいご飯の作り方を理解してもらうことができた。また子どもと一緒に工夫したおかずを作ることによって「災害時にも役立つのではないか」と心の準備をすることができた。さらに災害に備えて避難場所や防災グッズを確認する必要性があることなどを再認識することもできた。
- ・ 災害時の食事作りをした我が子からの「災害時の食事作りは任せて」の言葉を聞き、頼もしさや成長を喜んだ保護者からの感想があり、学びの成果を感じた。
- ・ 災害時の食事を作る活動を家庭でも実践することで、教育相談時の話題となった。

○その他の成果

- ・ 災害時の食事づくりを実践したことにより、さらに発展として食事作り以外で役立つ防災グッズを作ることができた。

〈課題〉

- 1回の実践では期待通りの変容がみられない家庭もあった。今後も便りで知らせたり、家庭学習で取り組ませたりしていく必要がある。
- フリーザーバッグやレジ袋など熱に弱いものを使用してしまう家庭があったので、安全面を考慮し、徹底させるべきであった。
- ポリ袋を活用することは衛生的にはいいが、ごみが増えることが課題という意見もあった。今後、環境も視野に入れ考えていく必要がある。
- ポリ袋の種類や環境問題、防災など様々な点に目を向けることができることから、自由研究にも発展させていきたい。
- 学習後の保護者アンケートから「災害は来ないだろう」という気持ちがどこかにあり、家庭での話し合いだけで終わってしまったという声が聞かれた。今後は地域にも目を向けさせ、つながりや関わりを持つことの大切さを児童や家庭にも伝えていきたい。
- 子どもたちの考えた災害時のレシピをまとめ、町内施設や店舗等に置いたり、広報誌に掲載してもらったりして、災害時の食事を地域に広めていきたい。

(14) 夷隅支部 (学校数 6校 会員数 7 技術科 7名 家庭科 5名)

1. 夷隅支部研究主題

生活の営みに係る見方・考え方や技術の見方・考え方を働かせ、生活を工夫し創造する
学習指導のあり方

2. 主題設定の理由

技術分野では、新学習指導要領に於いて、情報活用能力を学習の基盤となる資質・能力と位置づけ、小・中・高を通じてプログラミング教育の充実がいられている。そのような中、夷隅支部では、学校数が少ないことから、他校の指導実践について知り、研修を深めることは大変重要である。そこで、小学校での必修化を受けての授業のあり方や新たに加わった「ネットワークを利用した双方向性のあるコンテンツのプログラミング」について、どのような授業を行っているか情報交換し、研修を深めることで、子どもたちが、情報の技術の見方・考え方を働かせ、問題を見いだして課題を設定し解決する力を身に付けさせるためにはどのような学習指導のあり方がよいか話し合う場を設けたいと考えた。

家庭分野では、近年、地震や津波、豪雨や土砂災害などが頻発する中で、災害時における調理について、日常食べているものに近い物を食べることが心理的な安定につながることや、食材や用具などは限られているが、工夫次第で調理が可能であることを知らせ、体験させることで、生徒自身が自分の手で災害に備えようとする意識を持ち、それが生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、生活を工夫することにつながると考えた。

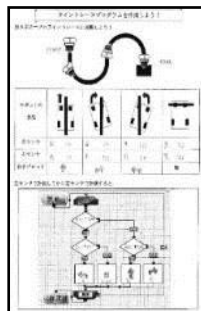
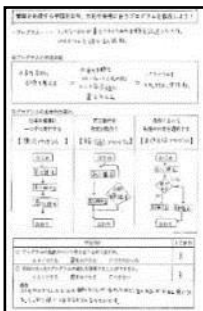
以上のことから、夷隅支部では、技術分野と家庭分野の両方に共通する研究主題を「生活の営みに係る見方・考え方や技術の見方・考え方を働かせ、生活を工夫し創造する学習指導のあり方」と設定し、研究を推進することとした。

3. 研究の概要

(1) 技術分野では、各学校からプログラミング学習とネットワークを利用した双方向性のあるコンテンツのプログラミングについての実践例を紹介した。

<実践例1> プログラムによる計測・制御 ～モーターカーの制御～

- ・計測・制御の基礎的・基本的な知識を定着させるためのワークシートの活用
- ・処理の手順に重点を置いた教材・教具の工夫



<実践例2> スクラッチとレゴ WeDo2.0 を活用したプログラミング学習

- ・スクラッチによるプログラミング
- ・レゴを活用したプロジェクト型学習

<実践例3> デジタル作品の設計と制作 ～Web ページ制作～

- ・HTMLを利用したWeb ページ制作

(2) 家庭分野では、1年時には「衣生活・住生活の自立」についての学習の中で、災害に備えて住まいの環境を整えることの必要性について学び、「生活の課題と実践」では、災害対策として家具の転倒防止や配置の工夫、非常持ち出し品の準備などに取り組んだ。

次に、調理実習体験の1つとして災害時の食事づくりを経験することで、工夫次第で自分自身の手で食事を用意する事ができることを実感させたい。そこで今回は、「災害にあった時を想定した食事づくりから、工夫できることは何か考えよう」というテーマで授業実践を行った。

題材としてシチューを取り上げ、ポリ袋に材料を入れ湯煎で加熱調味する方法での調理を体験させた。



4. 成果と課題

<技術分野>

(1) 成果

- ・他の学校の授業実践を発表することで、新たな知識を得たり、疑問に思うことについてお互いに教え合うことができた。それによって、自分の取組の見直しにつながった。
- ・新学習指導要領における改訂の主旨についての理解につながった。
- ・少ない人数ではあるが、切磋琢磨し、お互いに高め合おうという雰囲気をつくることができた。

(2) 課題

- ・人数が少ないこともあり、すべての人が多くの仕事を抱える中で、支部として研究に取り組むための十分な体制をつくれなかった。
- ・技術の見方・考え方について、より明確に捉える必要がある。
- ・どんな工夫ができたのか、何をもって評価したらよいかを明確にできなかった。

<家庭分野>

(1) 成果

- ・災害時を想定することで、いざという時の心構えの面でも有意義であった。
- ・ポリ袋に材料を入れ湯煎することで、できあがった物をポリ袋ごと食器に入れて食べることで食器を汚さず、後片付けに用いる水も節約できた。
- ・「何が工夫できるか」をいくつかの視点で授業展開したことで、様々な視点での工夫できることを子どもたちが考えることができた。

(2) 課題

- ・1時間展開で行ったため、時間が足らなかった。2時間展開であれば、ゆとりを持って取り組めた。

(15) 安房支部

(学校数 14校 会員数 21名 技術科 10名 家庭科 11名)

1. 安房支部研究主題

— 学びを生かし，生活を創造する力を育てる指導のあり方 —

2. 主題設定の理由

技術・家庭分野ともに，溢れるほどのものがある時代に，如何にして生活に目を向けさせ，学びを生かしてより良い生活を築くために創造する力を育てるかをテーマに研究を進めた。

この主題を達成するためには，児童・生徒が自ら工夫創造しながら意欲的に取り組める学習活動となるように授業改善することが必要である。安房支部では，本教科の特性を生かし，実践的・体験的活動を通して，自ら課題を解決していく力を育てることを目指し，本主題を設定した。

3. 研究の概要

(1) 研究仮説

- ①基礎・基本の定着と学習目標を明確化することにより，生活を創造する力を育てることができるであろう。
- ②日頃の生活に根ざした指導計画の改善・観点別評価規準の見直しと題材開発を行い，児童・生徒の実態に即した学習支援の充実を図ることにより，生活を創造する力を育むことができるであろう。
- ③研修の中核に実技研修や体験的研修を多く取り入れることで，指導者の資質・指導力の向上に努めれば，より充実した学習支援ができるであろう。

(2) 活動の概要

今年度，技術分野については，「設計の具体化を図る試作品を取り入れた技術による問題解決能力を高める指導法」，家庭分野については，「自分の消費生活に関心を持ち，自立に向け思考・判断ができる生徒の育成を目指した授業実践」という視点から研修・実践を進めた。

仮説①・②については，技術分野・家庭分野共に「日常の生活」に結びつけた研修・実践を進めた。技術分野では，「材料と加工の技術」において，強度や板厚や接合など，製作時に起こりうる課題を試行錯誤する場を設定することで，問題解決能力の育成を図った。家庭分野では，消費者生活に関心を持たせ，生活の自立に向け，知識の習得と思考・判断ができるように体験的・実践的な活動を取り入れた授業を展開した。

仮説③については，実践的・体験的活動を通して研修が深められるよう，実技研修を取り入れた。夏季休業中の実技研修では，新学習指導要領に即した内容を取り入れ，技術分野では，ICT機器を活用して，工作機器の適切な使い方を確認した。「材料と加工の技術」では，おもちゃラックの製作，「情報の技術」では，3Dプリンターの活用及び，センサーライトの基板作成を行った。家庭分野では，「衣食住の生活」で，房総太巻き祭り寿司づくり，「家族・家庭生活」では，中学校の学習指導要領と高齢者との関わり介護について研修を行った。教研集会では，技術分野で，鴨川

市立鴨川中学校，家庭分野で，館山市立第二中学校の実践報告がされ，部会の研究のまとめとして多くの意見が交わされた。また，毎年開催される「安房地方小学校家庭科，中学校技術・家庭科作品展」も，研修成果が反映された作品が多く展示されていた。

(3) 主な活動

期日	会場	活動内容
4 / 2 4 (水)	嶺南小学校	一斉研修日① 「総会と役員選出，行事計画の検討」
6 / 1 9 (水)	総合教育センター	小学校家庭科研修（中央伝達）
6 / 2 7 (木)	総合教育センター	中学校技術・家庭科研修（中央伝達）
7 / 2 6 (金)	鴨川中学校	小学校家庭科実技研修会 「伝達講習」
8 / 2 (金)	鴨川中学校	一斉研修日② 「新学習指導要領について」 「教研集会へ向けてのレポート作成」
8 / 6 (火)	鴨川中学校	実技研修会「伝達講習」
8 / 2 1 (水)	館山市内	安房地方教育研究集会 技術分野提案：新里 拓也（鴨川中） 家庭分野提案：高橋 茉莉（館山二中）
1 1 / 5 (火)	嶺南小学校	一斉研修日③ 「作品展打ち合わせ，県教研報告」
1 1 / 9 (土)	総合教育センター	ものづくり教育フェア
1 / 2 4 (金)	安房教育会館	研修会 作品展審査，会場準備
1 / 2 5 (土) 2 6 (日)	安房教育会館	小学校家庭科，中学校技術・家庭科作品展
2 / 7 (金)	嶺南小学校	一斉研修日④ 「本年度の反省と来年度の方向性」

4. 成果と課題

技術分野では，生活体験の乏しい生徒の実態を考慮した指導法の工夫として，設計段階での指導法の改善は，自ら課題を設定し解決しようとする態度を育むことができ，よりよい生活を目指す態度の育成に繋がるものとなった。家庭分野では，中学校での正規教員が5名と少ない中であるが，会員在籍校すべてが同一テーマで授業実践と検討・改善を行った。日常生活に根ざした指導は，生徒の実態に即した学習支援の充実を図ることに繋げることができた。

次年度は，学習指導要領移行期間として，指導内容やカリキュラムについて共通理解を図る場を設け，年間指導計画の作成を進める必要がある。また，技術分野では共通テーマでの実践を通し，指導力の向上を目指したいと考える。

(16) 君津支部

(学校数 89 校 会員数：中技術科 15 名 中家庭科 14 名 小家庭科 5 名)

1. 君津支部研究主題

小学校家庭科 「生きる力を育む家庭科教育のあり方」

～生活の自立と共生の基礎づくりをめざして～

中学校技術・家庭科

「確かな知識と技術を身に付け、社会の変化に対応し

生活に活かす力を育む学習指導のあり方」

2. 主題設定の理由

(1) 小学校家庭科

「単なるものづくり」や「調べ学習」ではなく、生活を見つめ、解決方法を考え、実践する。このような授業展開を積み重ねることで、児童の生活重視の価値観を育てたいという願いを込めて本主題を設定した。

(2) 中学校技術・家庭科

生徒が問題解決能力などの「生きる力」を身につける必要があると考えた。そこで、実践を通して技術に関する関心を高め、思考力や判断力、表現力などを身につけ、生徒自身が自ら課題や問題を見つけ生活を工夫し改善するなどの能力を育成することで主題に迫ることとした。

3. 研修の概要

(1) 小学校家庭科

6月は、「カラーコーディネート講座」と「クラフトテープを用いた小物づくり」を中学校家庭科と合同で実施。カラーコーディネート講座では、色と記憶色、色の同化と対比、食の三原色という3つの視点での講義だった。食事の際、煮物は茶系の食器を使ったり、デザートはその物と同じ色の食器を使ったりすることで、食べ物の色味が強調され、満足度が上がり、よりおいしく見える効果があることを学んだ。クラフトテープを用いた小物づくりの演習では、「平編み」という編み方で編んでいくと、バッグやかごえを作ることができる。これは、生地の上原織組織の「平織」という織り方と共通しており、シンプルな構造であり、糸どうしの接点が多いため、丈夫に仕上がるという利点もあり、クラフトテープを使った小物づくりを通して、被服分野への知識を深めることができた。

8月は、「食・衣に関する研修」を行なった。新学習指導要領で取り入れられる「根菜類」を取り入れたみそ汁、ご飯、ほうれん草のお浸し、こふきいもの調理を行った。じゃがいもは水から茹で、ほうれん草は下の部分から茹でるなど、調理の基礎基本を身に付けることができた。「衣に関する研修」では、新学習指導要領の「袋物」を意識した実習であった。ミシンで直線縫いをし、ペットボトルカバーを仕上げた。

11月、「魚と野菜の調理」の研究授業を行った。学校給食では野菜と魚の残菜が多いことから、「魚と野菜の調理」を取り上げ、調理上の性質と適切な取り扱い方法を知り、食生活に対する関心を高め、日常生活における実践化へつなげる題材であった。グループで汁物に入れる具を考える活動があったが、学び合いがしっかりと身につけており、他の人の話を聞いてメニューの幅を広げることができた。言語活動では、話すだけでなく、文章化することで思考を表現することができた。

(2) 中学校家庭科

8月以外、小学校家庭科と合同で実施した。8月は、「45分でできる太巻きづくり」「高齢者体験と高齢者の特性を踏まえた講義」を行った。太巻き寿司は南房総の郷土料理でもあるため、日本の伝統的な食生活にもつながる内容であった。また、外部より講師を招き、実際に高齢者体験を行った。新学習指導要領でも、少子高齢社会の進展への

対応という目的があるため、生徒にも高齢者体験をさせる必要性を感じた。今までになかった観点で扱いが難しい題材であるが、今後も研修で取り上げていきたい内容である。

(3) 中学校技術科

6月は、『授業の KIME 技』を活用し、授業改善についてのグループディスカッションを行った。環境整備についてポイントを置いて、意見交換した。授業の開始時と終了時でのチェックポイントを確認し、安心・安全な教室環境をつくるにはどうしたらいいかについて考えることで、技術に興味・関心を持ちやすい環境についての理解を深めた。意見交換する中で、新たな発見も多くあり、有意義な時間となった。

8月は、「おもちゃラックの製作」を行った。学力の三要素のバランスのとれた育成や安全確保に留意できる指導者を目指すことを目標に研修が行われた。加工の随所で機械工具を使用する機会があり、機械工具の安全かつ正しい使用方法を確認する場となった。ラックのサイズは個人個人で自由に決めることができ、それぞれがどういったものを入れたいかということなども踏まえながら、自由に製作することができた。

「計測制御・エネルギー変換に関する研修」ではセンサライトには温度センサや光センサがついており、計測・制御についても理解を深められる教材と言える。マニュアルには回路図も記されていて、各回路の働きについても学んだ。LED センサライトに「Arduino」と互換性のあるプログラミング基盤を取り付けることで、計測・制御に関するプログラミングによる問題の解決も容易に行うことができ、今後、教材を選定していく上での参考になった。

「情報に関する技術」の中で、プログラムによる制御についての授業を展開した。対話的・主体的で深い学びの姿が授業の中で数多く見られ、授業を通じてより良いプログラムの選択・作成ができるようになり、部会員にとっても非常に参考になった授業であった。授業の進め方、ICTの活用方法も勉強することができた。

4. 成果と課題

(1) 研修の成果

- ①小学校家庭科：どの研修や授業研究会においても、新学習指導要領を意識した内容となっており、調理や被服の基礎・基本を身に付けることができ、生きる力を育む家庭科教育についても考えることができた。
- ②中学校家庭分野：学習指導要領の改訂において、時間のない中でも、中身が濃く、効率的な授業内容にしていくための学習をすることができた。また、各学校の先生方と授業実践の意見交換を行うことで、より深い学びへとつなげることができた。
- ③中学校技術分野：学習指導要領の本格実施を見据え、情報に関する技術の計測・制御、プログラミングについて複数回の研修を行うことができた。小学校でどの程度のプログラミング教育が行われて中学校の授業に臨むかは定かではないが、一年間の研修でプログラミングに対する関心も高まり、多少の不安解消につなげることができた。

(2) 今後の課題

- ①小学校家庭科：来年度からは小学校において新学習指導要領実施となる。新しい教科書にしっかりと目を通し、「和食（だし）」の扱いや「持続可能な社会づくり」を意識した指導ができるようにしたい。
- ②中学校家庭分野：免許を持った教員がいない学校でも、家庭科の免許を持った教員と同じ指導ができるような手立てや資料作りをしていかななくてはならない。実技伝達講習でも、免許外の教員や臨免の教員でも参加しやすい研修内容に変える必要がある。
- ③中学校技術分野：「主体的・対話的で深い学び」を技術・家庭科の授業でどのように取り入れていくかが大きな課題である。より効率的に授業を展開し、効果的に「主体的・対話的」に学ぶことのできる授業の工夫を考えることが大切である。また、双方向性プログラムについては、今後も研修が必要である。

令和元年度 千教研 技術・家庭科教育部会 役員名簿

No.	役職	氏名	勤務校	校長名	郵便番号	学校所在地	電話番号	備考
1	会長	山田 克彦	千葉市立こてはし台中	山田 克彦	262-0005	千葉市花見川区こてはし台5-15-1	043-259-1336	千葉
2	副会長	井川 富美子	船橋市立丸山小	井川富美子	273-0048	船橋市丸山4-43-1	047-439-2123	船橋
3	副会長	若林 雅夫	袖ヶ浦市立平川中	若林 雅夫	299-0236	袖ヶ浦市横田500	0438-75-2141	君津
4	副会長	近藤 昌彦	佐倉市立王子台小	近藤 昌彦	285-0837	佐倉市王子台5-19	043-487-1376	印旛
5	副会長	市原 喜郎	横芝光町立南条小	市原 喜郎	289-1713	山武郡横芝光町小田部1054	0479-85-1123	山武
6	副会長	前田 真帆	千葉市立幸町第三小	前田 真帆	261-0001	千葉市美浜区幸町1-10-1	043-241-7807	千葉
7	副会長	迎 寿美	千葉市立葛城中	大井 力	260-0853	千葉市中央区葛城2-9-1	043-227-5566	千葉
8	会計監査	米石 達也	八千代市立睦中	米石 達也	276-0004	八千代市島田台756	047-450-2006	八千代
9	会計監査	角田 直彦	匝瑳市立須賀小	角田 直彦	289-2132	匝瑳市高1956	0479-72-0476	東総
10	研究部長	三宅 健次	千葉大学教育学部附属中	藤川 大祐	263-8522	千葉市稲毛区弥生町1-33	043-290-2493	千葉
11	研究副部長	服部 仁典	松戸市立六実中	前原 高雅	270-2203	松戸市六高台5-166-1	047-388-1190	東葛
12	研究副部長	渡邊 宏幸	君津市立久留里小	宇佐美和子	292-0422	君津市久留里474	0439-27-2361	君津
13	研究副部長	佐藤 理恵子	白井市立南山中	小野 義勝	270-1423	白井市南山1-6-1	047-492-1441	印旛
14	研究部員	内藤 利枝子	千葉市立末広中	村松 幸郎	260-0843	千葉市中央区末広2-10-1	043-265-1818	千葉
15	研究部員	林 仁美	八街市立八街北中	折目 宇和	289-1107	八街市八街ほ18-2	043-442-8101	印旛
16	中学校部長	伊藤 肇	四街道市立四街道西中	沖永 寛	284-0001	四街道市大日23	043-421-2081	印旛
17	中学校副部長	伊藤 嘉章	柏市立富勢西小	伊藤 嘉章	277-0825	柏市布施84-2	04-7132-2244	東葛
18	中学校副部長	田村 真理	千葉市立若松台小	田村 真理	264-0027	千葉市若葉区若松台2-25-1	043-232-7335	千葉
19	中学校副部長	北島 啓行	千葉市立加曾利中	増澤 保明	264-0017	千葉市若葉区加曾利町961-5	043-231-1794	千葉
20	中学校副部長	宮内 雅史	市原市立千種中	山越 康義	299-0109	市原市千種6-1-1	0436-21-2918	市原
21	中学校副部長	本間 照美	八街市立八街中央中	大坊 孝志	289-1115	八街市八街ほ591	043-444-1217	印旛
22	中学校副部長	後藤 恒治	茂原市立東中	田中 弘樹	297-0017	茂原市東郷301	0475-24-2141	長生
23	中学校部員	高畠 亮策	成田市立久住中	松岡 薫	286-0819	成田市久住中央2-1	0476-36-0602	印旛
24	中学校部員	平 大樹	流山市立西初石中	浦沢 雄一	270-0121	流山市西初石4-455-1	04-7154-3091	東葛
25	中学校部員	佐野 貴紀	木更津市立清川中	中務 公明	292-0035	木更津市中尾1096	0438-98-0188	君津
26	中学校部員	小嶋 健一	流山市立南部中	澤出 敏光	270-0176	流山市加3-600-1	04-7158-0137	東葛
27	中学校部員	横山 由佳子	千葉市立泉谷中	大西 徹	266-0032	千葉市緑区おゆみ野中央4-2	043-291-6600	千葉
28	中学校部員	川口 愛花	山武市立山武中	小高 一徳	289-1223	山武市壇谷1855	0475-89-1009	山武
29	小学校部長	前田 真帆	千葉市立幸町第三小	前田 真帆	261-0001	千葉市美浜区幸町1-10-1	043-241-7807	千葉
30	小学校副部長	大原 晴子	松戸市立松飛台第二小	大原 晴子	270-2214	松戸市松飛台59	047-385-4111	東葛
31	小学校副部長	竹澤 英樹	四街道市立八木原小	竹澤 英樹	284-0015	四街道市千代田5-4	043-423-7611	印旛
32	小学校副部長	朝倉 真由美	旭市立古城小	朝倉真由美	289-0511	旭市鑄木2699	0479-68-2421	東総
33	小学校副部長	児玉 喜久子	佐倉市立千代田小	大三川 弘	285-0834	佐倉市吉見553	043-487-3140	印旛
34	小学校副部長	鳥羽 波峰	千葉市立園生小	網野 一志	263-0043	千葉市稲毛区小仲台9-30-1	043-251-8140	千葉
35	調査編集部長	江原 雅之	佐倉市立佐倉東中	野村 英二	285-0046	佐倉市高岡423-1	043-486-3031	印旛
36	調査編集副部長	押元 和	南房総市立嶺南中	三平 智子	299-2526	南房総市沓見2075	0470-46-2142	安房
37	調査編集部員	長野 翔伍	船橋市立二宮中	安永 賢	274-0074	船橋市滝台1-2-1	047-466-2453	船橋
38	広報部長	伊藤 芳仁	千葉市立千草台中	伊藤 芳仁	263-0013	千葉市稲毛区千草台2-3-1	043-251-6129	千葉
39	広報副部長	宮原 尚	市原市立国分寺台中	堀川 裕二	290-0075	市原市南国分寺台2-1	0436-22-4567	市原
40	広報部員	大野 忠	千葉市立松ヶ丘中	内山 俊雄	260-0807	千葉市中央区松ヶ丘町440	043-261-5261	千葉
41	情報部長	濱田 勝久	千葉市立幕張西中	鈴木 義郎	261-0026	千葉市美浜区幕張西2-9-1	043-273-0396	千葉
42	情報部員	藤田 伸平	東庄町立東庄中	石橋 宏克	289-0615	香取郡東庄町青馬1756	0478-86-3131	香取
43	情報部員	七戸 亮太	船橋市立八木が谷中	増戸 隆之	274-0802	船橋市八木が谷2-9-1	047-447-1455	船橋
44	情報部員	菅 整	千葉市立大椎中	今井 功	267-0066	千葉市緑区あすみが丘8-26	043-295-7201	千葉
45	情報部員	君塚 久美	千葉市立美浜打瀬小	今関 正次	261-0013	千葉市美浜区打瀬2-18-1	043-213-2751	千葉
46	事務局長	榊原 英記	千葉市立白井中	小林 秀典	265-0053	千葉市若葉区野呂町623	043-228-0201	千葉
47	事務局次長	海老原 恭子	富里市立富里南中	葉山 憲一	286-0212	富里市十倉127-38	0476-93-1171	印旛
48	事務局次長	古屋 義和	市原市立双葉中	鈴木 恒行	290-0255	市原市光風台1-475	0436-36-6211	市原
49	事務局員	三瓶 繁義	富津市立天羽中	高梨 正己	299-1608	富津市岩坂109	0439-67-0615	君津
50	事務局員	藤田 展彰	富里市立富里中	東城 孝	286-0221	富里市七栄652-226	0476-93-0012	印旛
51	事務局員	飯塚 嶺	白子町立白子中	中田 宏	299-4215	長生郡白子町中里860	0475-33-2152	長生
52	事務局員	佐藤 翔	千葉大学教育学部附属小	片岡 洋子	263-8522	千葉市稲毛区弥生町1-33	043-290-2462	千葉
53	事務局員	淡路 倫子	袖ヶ浦市立昭和中和	林 健司	299-0257	袖ヶ浦市神納3204	0438-62-2034	君津
54	事務局員	船迫 千春	松戸市立六実中	前原 高雅	270-2203	松戸市六高台5-166-1	047-388-1190	東葛

＜支部理事＞

No.	支部名	氏名	勤務校	校長名	郵便番号	学校所在地	電話番号	F A X
1	千葉	大西 徹	千葉市立泉谷中	大西 徹	266-0032	千葉市緑区おゆみ野中央4-2	043-291-6600	291-5247
2	市原	高田 浩光	市原市立南総中	滝口 隆一	290-0509	市原市安久谷140	0436-92-0044	92-4476
3	習志野	三橋 直行	習志野市立第三中	富所 緑	275-0021	習志野市袖ヶ浦4-3-1	047-452-0330	452-0324
4	八千代	米石 達也	八千代市立睦中	米石 達也	276-0004	八千代市島田台756	047-450-2006	450-5459
5	船橋	下須賀 和実	船橋市立小室中	高見 美樹	270-1471	船橋市立小室町898	047-457-1865	457-1866
6	市川	松田 智	市川市立宮久保小	松田 智	272-0822	市川市宮久保5-7-1	047-371-2747	371-2748
7	浦安	鈴木 孝一	浦安市高洲中	鈴木 孝一	279-0023	浦安市高洲7-3-1	047-712-5533	382-1300
8	東葛飾	澤出 敏光	流山市立南部中	澤出 敏光	270-0176	流山市加3-600-1	04-7158-0137	7158-6291
9	印旛	野村 英二	佐倉市立佐倉東中	野村 英二	285-0046	佐倉市高岡423-1	043-486-3031	486-2096
10	香取	山本 一利	香取市立大倉小	山本 一利	287-0013	香取市大倉501	0478-57-0007	50-5085
11	東総	角田 直彦	匝瑳市立須賀小	角田 直彦	289-2132	匝瑳市高1956	0479-72-0476	70-2043
12	山武	時津 丈二	山武市立松尾中	井上 弘道	289-1514	山武市松尾町松尾112	0479-86-4411	86-4228
13	長生	小高 俊哉	長柄町立長柄小	矢部 進	297-0206	長生郡長柄町山根1619	0475-35-3105	35-5472
14	夷隅	芝崎 丈太	いすみ市立岬中	小高 太	299-4501	いすみ市岬町椎木1370	0470-87-2511	87-2587
15	安房	御子神 潤一	館山市立房南中	松山 毅	299-0225	館山市佐野2070	0470-28-0042	28-0495
16	君津	渡邊 修	君津市立周南中	渡邊 修	299-1117	君津市宮下1-4-1	0439-52-0624	52-0941

＜支部事務局長＞

No.	支部名	氏名	勤務校	校長名	郵便番号	学校所在地	電話番号	F A X
1	千葉	大橋 宏嗣	千葉市立泉谷中	大西 徹	266-0032	千葉市緑区おゆみ野中央4-2	043-291-6600	291-5247
2	市原	古屋 義和	市原市立双葉中	鈴木 恒行	290-0255	市原市光風台1-475	0436-36-6211	36-7673
3	習志野	山下 欣宏	習志野市立第七中	藤木 義久	275-0022	習志野市香澄6-1-1	047-451-8151	451-8150
4	八千代	佐藤 和幸	八千代市立大和田中	設楽 憲一	276-0044	八千代市萱田町645	047-484-5071	484-6716
5	船橋	市川 芳彦	船橋市立坪井中	押野 忠治	274-0060	船橋市立坪井東1-24-1	047-466-3104	466-3105
6	市川	田代 邦子	市川市立国分小	田代 邦子	2720833	市川市東国分2-4-1	047-371-6793	371-6794
7	浦安	永沼 岳紀	浦安市見明川中	山崎 益弘	279-0026	浦安市弁天3-1-1	047-353-7768	353-7031
8	東葛飾	田代 浩	流山市立東深井中	土井 邦博	270-0101	流山市東深井47	04-7154-5864	7155-1087
9	印旛	加藤 恒樹	印西市立印西中	鈴木 祥仁	270-1327	印西市大森2244	0476-42-3151	42-3649
10	香取	宮本 敏之	香取市立佐原中	大平 伸一	287-0001	香取市佐原口2124-1	0478-52-5157	52-5158
11	東総	大木 一真	匝瑳市立八日市場二中	椎名 和浩	289-2144	匝瑳市八日市場イ1687	0479-72-1375	72-1376
12	山武	五木田 和樹	山武市立成東中	井上 博文	289-1334	山武市和田567	0475-82-2548	82-7670
13	長生	三ツ本 勝	長南町立長南中	野口 智美	297-0121	長生郡長南町長南2060	0475-46-1190	46-1262
14	夷隅	芝崎 丈太	いすみ市立岬中	小高 太	299-4501	いすみ市岬町椎木1370	0470-87-2511	87-2587
15	安房	山田 裕也	南房総市立富浦中	袴田 晃宏	299-2416	南房総市富浦町青木249-1	0470-33-2075	33-4729
16	君津	松村 健二	木更津市立木更津第二中	矢野 直明	292-0801	木更津市請西941	0438-36-2280	36-2233

編集後記

平成から令和へ年号が変わり、新しい節目となる年度でした。教育界でも、新教育課程がいよいよ来年度から小学校で開始されます。その準備として重要な1年間でした。千葉県教育研究会技術・家庭科教育部会の、この大切な1年間の研究活動を「研究のまとめ」としてまとめることができました。原稿執筆に関わった先生方、本当にありがとうございました。

次年度も、各支部の活動報告や各研究大会、ものづくり教育フェアなどの内容を先生方のご協力のもとに編集していきたいと思えます。今後ともよろしくお願いいたします。

令和元年度「研究のまとめ」

発行日 令和2年2月14日

発行者 千葉県教育研究会技術・家庭科教育部会

代表者 山田 克彦

編集者 研究部

三宅 健次（千葉大学教育学部附属中学校） 渡邊 宏幸（君津市立久留里小学校）
服部 仁典（松戸市立六実中学校） 佐藤理恵子（白井市立南山中学校）
内藤利枝子（千葉市立末広中学校） 林 仁美（八街市立八街北中学校）

顧問

佐藤 紀夫	菊地 和子	毛利 洋一	関下 裕文	中山 米司	吉原 サト
大塚 文恵	蜂谷 昭夫	板倉 英雄	大嶋 六彦	笹生 芳郎	内山 猛
田野 定男	田野キヨエ	上原 利雄	野呂 徳則	齊藤 俊夫	福山 武夫
山中 家道	石橋富士夫	大野 伸子	関 弘子	佐藤 純次	畠山 和夫
矢崎 聖二	鈴木 定夫	裕本 清	石野 清恵	山本恵美子	菅藤 孝
町田 達雄	鈴木 芳朗	山本 嘉則	加藤 勇	松岡 和美	庄司 佳子
田島 治子	青木 清一	品地 敏明	宮坂 敬章	天野新太郎	飯塚 清
戸井 康子	高山 玲子	相京 貢	浅岡 正人	小出 泰幸	萬崎 保子